

タイトル	朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について
別言語のタイトル	조선어 형태론의 몇 가지 기본적 문제에 관하여
著者	金壽卿 著; 板垣竜太 訳 (Kim, Soo Gyong; Itagaki, Ryuta tr.)
所収シリーズ名	同志社コリア研究ワーキングペーパー
所収号	No. 3
発行者	同志社コリア研究センター (Doshisha Center for Korean Studies)
種別	翻訳
発行日	2021年8月13日

朝鮮語形態論のいくつかの基本的問題について

金壽卿^{キム スギョン} 著 (板垣竜太 訳)

訳者解題

本論文は、朝鮮民主主義人民共和国科学院の朝鮮語及朝鮮文学研究所(조선어 및 조선 문학 연구소)の機関誌『조선 어문』1956年1号と1956年2号に掲載された論文김수경「조선어 형태론의 몇 가지 기본적 문제에 관하여」(상)・(하)を全訳したものである。朝鮮科学院の創立は1952年で、当初は分野に関係なく『학보[学報]』に研究成果を出していたが、この頃より各研究所が独自の機関誌を出しはじめた。この論文は、言語学・文学分野の機関誌の創刊号に向けて金壽卿が寄稿し、あまりに長かったため2号に分載することになったものと思われる。

朝鮮語の形態論(単語の品詞や変化などを扱う分野)のなかでも、金壽卿が本論文で重点的に取り組んだのは、^토토(一般に漢字の「吐」が当てられるので、以下、そのように表記する)と呼ばれる文法要素の性格究明である。「吐」とは、日本の学校文法用語でいえば、体言の後ろにつく助詞や、用言の語幹の後ろにつく活用語尾、助動詞などを総称したようなものである。形態論的な言語分類によれば、朝鮮語は日本語と同様に「膠着語」に属す。「屈折語」に分類される英語の場合、「私」に相当する代名詞を格変化させようとするれば、I, my, meなどと単語自体を変化(屈折)させることになるが、日本語であれば「私は」「私の」「私に」などと、助詞の「は」「の」「に」を付け加える(膠着)ことで、同様のことを達成する。朝鮮語も同様である。この体言や用言に「膠着」して文法的な意味を表したりする吐とは一体何なのかを、金壽卿は本論文で明らかにしようとしたのである。

朝鮮戦争が起こる半年ほど前、公的な組織である朝鮮語文研究会は、北朝鮮最初の文法書『조선어 문법(朝鮮語文法)』(1949年末に出たので「1949年文法」と呼んでおく)を出した。拙著(『北に渡った言語学者:金壽卿 1918-2000』人文書院, 2021)でも書いたとおり、その草稿は金壽卿が書いたものだった。その時点で、吐は名詞や動詞などの各品詞のなかで説明されており、それ自体が形態論の独自の叙述項目を占めてはいなかった。ところが朝鮮戦争の休戦後の1954年に、中学校の教科書として金壽卿が書いた『조선어 문법 (어음론 형태론)(朝鮮語文法(語音論・形態論))』(1954年に出たので「1954年文法」と呼んでおく)では、吐は各品詞のなかでも登場し、さらに「補助的品詞」と位置づけられ、別項目でもまとめて説明された。本論文は、そのように吐の位置づけを変更したことを踏まえ、それを吐の「二重的性格」として理論化するために書かれたものである。

1949年文法と1954年文法のあいだには、もう1つ、言語学的に大きなできごとがあった。1950年にソ連の最高指導者スターリンが言語学に関する論文を公表したことである。スターリン論文は、言語が下部構造(土台)に対応して変化するような上部構造ではないと断じ、特に基本語彙と文法構造はゆっくりとしか変化しないと論じた。そしてこの言語のもつ持続性や、階級をこえて使用される特性から、言語を「民族」という存在に結びつけた。金壽卿は、北朝鮮でのスターリン論文受容において中心的な役割を果たした(拙著の第3章およびⅢを参照)。スターリンが持続的な文法構造の要素として「形態論」を挙げていたため、形態論上の特質の解明は「民族」的なもの

と結びつけられることになった。冒頭で、ある種の使命感とともにスターリン論文を引用しているのは、こうした背景がある。

拙著でも記したとおり、この意欲的な論文は、その後、吐をめぐる論争の火付け役となった。ここで提示された「말뭉치[マルモム]」(「語体」と訳した)という概念が定着することはなかったが、品詞とは何か、接辞とは何かなど、根本的な問題まで掘り下げて議論し、単に外国の論文を機械的に朝鮮語に適用するのではなく、むしろ徹底した吟味を通じて朝鮮語文法の独特の領域を設定していく議論の展開には迫力がある。

本論文で金壽卿は、朝鮮語文法を他言語(ロシア語、英語、中国語など)の文法と執拗なまでに対照させながら、朝鮮語にふさわしい文法体系を樹立しようとした。その関係で、ソビエト言語学を中心に、さまざまな文献が長々と引用、参照されている。本来であれば、金壽卿が参照した原典まで遡って、全て訳しなおすべきところだが、一部を除いてはそうした作業ができていない。ただ、金壽卿の論文では海外の人名も多くがハングルで書かれ、書誌情報も全て朝鮮語に訳されているため、そのままでは原典を参照するのも容易ではない。そこで、私の調べのついたかぎりにおいて、著者名表記や原典の書誌情報を訳注として付すことにした。また、本文中ではロシア語の文章や単語などが頻発するが、これについてはラテン文字(ALA-LC方式)によって表記した。

既に公表した2本の翻訳と同様に、この論文もご遺族の許諾を得て、ここに公開する。翻訳の誤りなどについては、ご指摘いただけると幸いである(ritagaki@mail.doshisha.ac.jp)。

I

科学としての文法の特徴は、それが抽象化し一般化する性格を有している点にある。これについてイ・ヴェ・スターリン[И. В. Сталин]は次のように言っている。

文法の明白な特性は、それが具体的な単語ではなく、一般的に何ら具体性もない単語を念頭におきながら、単語の変化に関する規則を与えるとともに、それが何らかの具体的な文章、たとえば具体的な主語や具体的な述語などではなく、ある文章の具体的な形態には関係なしに、一般的に、あらゆる文章を念頭におきながら、文章を構成するための規則を与える点にある。したがって文法は、単語においても文章においても、特殊なものや具体的なものを抽象し、単語の変化と、文章における単語の結合の基礎にある一般的なものをとりだし、それによって文法的規則や文法的法則をつくる。^①(イ・ヴェ・スターリン《マルクス主義と言語学の諸問題》朝鮮語翻

^① スターリン全集刊行会訳『スターリン戦後著作集』(大月書店, 1954年, 151-152頁)の日本語訳は次のとおりである(その次に引用する部分も合わせておく)。「文法の特性は、それが具体的な単語を念頭におかず、具体性を考えない単語一般を念頭におきながら、単語の変化の規則をあたえる点にある。文法は、なんらかの具体的な文、たとえば具体的な主語や具体的な述語などではなく、あれこれの文の具体的な形態には関係なしに、一般に、あらゆる文を念頭におきながら、文を構成する規則をあたえる。したがって、文法は、単語においても文においても、特殊なもの、具体的なものを捨象しながら、単語の変化と、文中の単語の組合せの基礎にある一般的なものをとりだし、これをもとにして文法の規定や法則をつ

訳, 1952年, 33~34頁)

したがって文法的規則は特殊なものとの具体的なものからの抽象であり, 単語と文章に固有の一般的特性の反映である。こうした意味において, 「文法は, 人間の思惟の長久なる抽象活動の所産であり, 思惟の巨大な成果の指標」(同上書, 34頁)となる。

朝鮮語の文法を研究するに際しても, 文法的抽象, 文法的一般化の原則のうえにしっかりと立って, 朝鮮語の文法的規則, 朝鮮語の文法的法則を設定するよう努力しなければならないことは, 再言を要しない。

しかしながら, 個々の具体的な言語はそれに固有の, ただそれだけに内属する特性を有している。したがってどのような言語の研究においてであっても, その言語がもつあらゆる特性, あらゆる固有性を明らかにすることが最も重要な課業として立ち現れる。

朝鮮語の文法構造を研究する際にも, 朝鮮語の実在的な言語資料に立脚し, 朝鮮語固有の独自の特性を明らかにするよう, 特別な努力を傾けなければならないだろう。

まさに「文法学者の課業は, 現実的に言語のなかにあるものを正しく明らかにし, 体系的に叙述することに」あり, 「各種の文法の流派が存在するだけに, われわれはまさにそれらをこの観点から, もう一度いうならば, 言語のなかに現実的にあるものをそれらがどれほどただしく正確に反映しているかという観点から評価しなければ」ならないからである(モスクワ総合大学《現代ロシア語形態論》^①モスクワ, 1952年, 26頁, 傍点は引用者)。

この論文はまさにこうした立場の上に立ち, 朝鮮語の文法構造, 特に形態論の分野において現在先鋭的に提起されているいくつかの基本的な諸問題について, 若干の解明を試みることをその目的としている。

II

朝鮮語文法構造の特性を明らかにする際, まず朝鮮語が形態論的言語分類においてどのような類型に属しているのかを見るのは有益であり, また必要なことである。

形態論的言語分類が, それのもつあらゆる欠点にもかかわらず, 一定の認識的意義をもっていることについて, アー・エス・チコバワ[A. C. Чикобава]は次のように述べている。

くりあげる。文法は, 人間の思惟の長期にわたる抽象活動の成果であり, 思惟の巨大な進歩の指標である。」なお, 金壽卿がここで使用している「朝鮮語翻訳」とは, 朝鮮労働党出版社から1952年6月24日付で発行された『맑스主義와 言語學의 諸問題』のことである。

^① 書誌情報ははっきりしないが, В.В. Виноградов, *Современный русский язык : морфология*, Изд-во Московского унив., 1952 年。

形態論的言語分類は、2つの本質的な欠陥を有している。1つは、この分類が言語構造のさまざまな多様性をすべて包括できないこと。もう1つは、設定された形態論的類型によってそれらを相互に区分することが困難であること。[…]

しかし形態論的分類は、にもかかわらず一定の認識的意義を失ってはいない。この点において2つの事情を考慮する必要がある。

仮にわれわれが1つの言語の形態論的類型を知れば、その言語の文法の構成や分化がどのようなものであるかという予測がつく。膠着語と屈折語の文法構造を研究するときには、当然のことながら形態論に大きな注意を向けることになる。しかし孤立語の文法では、本質において形態論を必要としていない。統辞論^①が中心となっているためである。こうして1つの言語がどのような形態論的類型に属するのかを明らかにすることは、その言語の科学的記述文法を建設するうえで意義をもつ。

こうして研究される言語が所属する形態論的類型を明らかにすることは、現象の歴史に関する問題の正しい設定のために、その言語の歴史における正しい方向の決定のために、貴重な指示を与えることができる。

したがって形態論的分類はそれがもつあらゆる欠陥にもかかわらず、1つの言語の記述文法の研究のためであれ、歴史文法の研究の面においてであれ、一定の意義を失うことはない。

(アー・エス・チコバワ《言語学概論》第1部^②, モスクワ, 1953年, 第2版, 189~190頁)

これと同一の思想は、ペー・エス・クズネツォフ[П. С. Кузнецов]の著書でも見いだすことができる。

形態論的分類は、その研究のあらゆる欠陥にもかかわらず、各種の言語の形態論的構造の基本的特性を明らかにしてくれる。構造上、各種の類型のあいだで中間的な位置を占める諸言語が存在するという事は、決してこの分類を拒否する動機とはなりえない。いかなる分類においても基本的な、いわば理想的な類型が規定され、そのあいだに数多くの各種の過渡的な類型が存在しうる。(ペー・エス・クズネツォフ《形態論的言語分類》^③モスクワ, 1954年, 13頁)

今日まで最も広く承認されてきた形態論的言語分類は、まずアウグスト・シュレーゲル[August von Schlegel]によって作られ、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト[Wilhelm von Humboldt]によって修正補充

① 本稿では、金壽卿の用いる漢字語の言語学用語について、原則として「文章論」→「統辞論」, 「形態部」→「形態素」と言い換える。

② А.С. Чикобава, *Введение в языкознание*, 2-е изд, Государственное учебно-педагогическое изд-во, 1953.

③ 不明ながら、同一著者の類似の書名でいえば次のものがある。П.С. Кузнецов, *Историческая грамматика русского языка : морфология*, Изд-во Московского университета, 1953.

された分類をその土台とする, 次のような 4 種の基本的な類型に分類される。1) 孤立語あるいは無形態語, 2) 膠着語, 3) 屈折語, 4) 抱合語。

もちろんここに設定した類型は, いわば理想的な類型であって, そのあいだには多くの言語が中間的位置を占めている。ただ, 一言語がもつ支配的な, 最も特徴的な標識に依拠し, その言語をある一類型に所属させているのである。

一般的に言えば, 朝鮮語が形態論的言語分類において膠着語の類型に所属することについては, これまで内外の学界でこれといった異論はない。

では, まず膠着語の一般的特性を探ってみよう。

アー・アー・レフォルマツキー[A. A. Реформатский]は, 言語の文法的手法の 1 つとしての接辞法の手法に関連して, 膠着語と屈折語の特性を次のように対比している。

世界の諸言語のなかで, 相互に異なる 2 つの傾向の接辞法を観察することができるが, この事実はテュルク語とロシア語の格の形態を比較することによって容易に明らかにしうる。ロシア語の単語 *pila*(のこぎり)の 4 つの格形態について, これをカザフ語に翻訳してみよう。

ロシア語において

カザフ語において

<i>pil-a</i>	単数主格	<i>ara</i>
<i>pil'-ë</i> ^①	単数与格	<i>ara-ga</i>
<i>pil-y</i>	複数主格	<i>ara-gar</i>
<i>pil-am</i>	複数与格	<i>ara-lar-ga</i>

1. 語根が変化しうる。この例では, ときに硬音 [l] になったり, ときに軟音 [l'] になったりする。他の場合には語根あるいは語幹の構成がより激しく変化することもある: *son-sna* [眠り], *den'-dnia* [昼間], *drug-druz'ia* [親友], *chort-cherti* [悪魔] ほか。

2. 接辞が一義的でなく, 同時にいくつもの文法的意味を表現する (-am は, 同時に与格と複数の意味を表す)。

1. 語根が変化しない。

2. 接辞が一義的である。換言すれば, それぞれの接辞は 1 つの意味だけを表現する: -ga - 与格, -lar - 複数。したがって, 複数と与格を共に表現するためには, 2 つの接辞 *lar-ga* を必要とする。

① *пила* の単数与格が *пил'я* となっていて, 語根が軟音に変化しているということになっているが, 現代ロシア語では *пиле* となっているのではないかと思われる。

- | | |
|--|--|
| 3. 接辞が規格化されていない。単数においては与格が接辞-è によって表現され、複数においては接辞-am によって表現される。しかし他の単語においては、単数与格が他の接辞によっても表現しうる。stol-u [テーブルに], put-i [道に]。したがって同義語的接辞がありうる。 | 3. 接辞が規格化されている。換言すれば、1つの文法的意味のために存立し、常に同一の接辞が使用される:-ga はいかなる単語においても単数と複数における与格を表し、-lar はいかなる単語においても、すべての格で複数を表す。 |
| 4. 接辞が語幹に接合される。語幹は、この接辞なしには普通使用されない。 | 4. 接辞が、すでに完備された単語に接合される;接辞を取り除いても、常に現実的に存在する単語が残ることになる。 |
| 5. 多義的たりうる、規格化されていない接辞が、変化しうる語根にこのように緊密に接合することを、融合と呼ぶ。 | 5. 多義的な規格化された接辞が、変化しない語根にこのように機械的に接合することを、膠着と呼ぶ。 |

膠着はアジア、アフリカ、オセアニアの大多数の言語に固有のものであり、融合は基本的にインド-ヨーロッパ諸語に固有のものである。

膠着においては、接辞が外的であれ内的であれずっと自立的であるため、ただ一つ一つがつながっていくだけであり、語根や他の接辞と一体化してしまうことはない。それらの境界線は明確である。これらの言語においては、単語がきわめて長くなることが可能である[...]

膠着においては、単語造成が語根からはじまり、これらの言語においては、語幹の概念がしばしばその意味を喪失する。(アー・アー・レフォルマツキー《言語学概論》^①モスクワ, 1947年, 90-91頁)

ペー・エス・クズネツォフによれば、膠着語的類型においては、単語造成的および単語変化的接辞の存在がその特徴となる。しかしこのとき単語における形態素(語根、接辞)のあいだの連携が、屈折語的類型の場合に比べて、より緊密である。単語における個別的形態素のかかるより低い緊密性と、より高い自立性は、次のような点に表れる。

第一に、語根や接辞やあらゆる形態素は、純然に語音論的条件に起因する変化を度外視すれば、同一の形態で残される。

第二に、それぞれの接辞は、ただ一つの文法的意味を表し、それぞれの文法的意味は常に同一の接辞によって表現される。すなわち、さまざまな種類の格変化と活用があるのではなく、ただ1つの種類の格変化と活用があるのみである。これらすべてのことは、屈折語に比べ膠着語におい

^① A. A. Реформатский, *Введение в языкознание: Учебник для вузов*, 1947.

ては接辞がより高い自立性を有しているということを語っている。

第三に、形態素間の連携の緊密性が低い。仮に語音同化現象が起きたとしても、形態素間に厳格な境界線をひくことは常に可能である。形態素の緊密でない自由な連結が特徴である。(ペー・エス・クズネツォフ《形態論的言語分類》16～18頁参照)

膠着語における形態素、特に接辞がもつ独特の自立性と有意味性については、エル・アー・ブダゴフ(P. A. Будагов)も次のように語っている。

膠着語においては、単語間の文法的関係が、単語の不変の語幹に添加される独特の「付け加え」によって伝達される。それぞれのこうした付け加え(独特の接辞)は、1つの厳格に規定された意味を有する。[...]こうして語幹の後に、いわば独特の接辞(付け加え)が連結され、その1つ1つはただ1つの規定された意味を有する。[...]膠着語であるトルコ語の接辞は、ロシア語やその他の屈折語では通常見られるように、同時にいくつかの意味を表現することができない。[...]のみならず、トルコ語の語幹は常に変化することなく、したがってこの言語においては、屈折語のいわゆる不規則動詞、形態論的「例外」等々の現象はまったく表れないのである。(エル・アー・ブダゴフ《言語学概論》^①モスクワ, 1954年, 220-221頁)

接辞がもつ有意味性の独特の性格は、膠着語のみならず屈折語においても認められる。

最後に、全体的に見て、接辞は、語根と屈折語尾を除外した単語のあらゆる形態論的部分であり、これはいわば語根の意味を物質的に実現し、単語と文法的範疇の形成に参加する。語根は接辞とともに単語の語幹を成す。

接辞の文法的性質はきわめて複雑で多様である。[...]にもかかわらず、語根とあらゆる種類の接辞とのあいだには本質的な差異がある。

例をあげれば、ロシア語のような今日高度に発達した言語においては、接辞が単語の語根よりもずっと一般的で抽象的な意味を有している。[...]のみならず、周知のとおり、語根はそれ自体、まさに単語となって自立的意味をもちうる: stol[机], dom[家]。接辞はこれとは異なる。接尾辞、接頭辞、接中辞等は、近代語において大多数の場合、それ自体が自律の意味をもっていない。[...]

では、これらすべてのことは、接尾辞や接頭辞のような接辞が一般的に何らの意味ももっていないということの意味しているのであろうか。決してそうではない。それは抽象的、文法的意

^① P. A. Будагов, *Очерки по языкознанию*, Изд-во Академии наук СССР, 1953.

味をもっている。[…]

まさにここに、言語における独特の形態素としての接辞が、現代の諸言語において何よりもまずそれが有する抽象的、文法的意味によって性格づけられる理由がある。(エル・アー・ブダゴフ《言語学概論》142-143頁, 傍点は引用者)

以上、われわれは接辞が、特に膠着語において厳格に規定された自らの意味を有し、他の形態素との関係においてより低い緊密性とより高い自立性をもっていること、換言すれば屈折語に比べて膠着語の接辞は総体的にみて意味的完結性と区画可能性をより多くもっていると結論づけることができる。

III

朝鮮語の形態論研究において最も重要な問題として提起される品詞分類を解決するために、まず一般的に品詞分類の原則に関する問題を考察してみよう。

科学的な記述文法編纂の諸問題を論じたヴェ・アー・アウロリン〔В. А. Аврорин〕以下の集団的な報告者は、次のように言っている。

相互に異なる体系の諸言語の記述文法の編纂者の前には、さまざまな特殊問題と各種の困難な諸問題が提起される。最も困難な問題の1つは品詞分類に関する問題であり、チュルク、モンゴル、イラン、フィン・ウゴルその他の諸言語の専門家は、常にあれやこれやの困難に逢着することになる。この困難さは、それぞれの言語の品詞体系が一定の独自性をもっているために生ずることになる。言語研究者はしばしば先入的見解をもって品詞を分類しはじめるのであるが、これは普通その研究者がよく研究している他の言語の文法的図式の影響を受けているということによって説明される。われわれの条件では何よりもロシア語文法の図式がかかる事実の模範的事例となる。互いに異なる文法体系の対照は、それ自体としては有益である。それは研究される言語の文法構造の独特の特性をよりよく引き出すことができるからである。こうした対照の否定的な結果は、ただ言語の諸事実を人工的にこの文法図式にはめ込もうとする場合にのみ現れる。今日われわれはみなエル・ヴェ・シチェルバ〔Л. В. Щерба〕の次のような思想に同意する。「品詞に関する問題において、研究者は、どんな権威があつて賢明だとしても、先入観をもって設定された原則に依拠して単語を分類してはならない。研究者は、まさにいかなる分類が言語体系それ自体に最も適合するかを研究しなければならない。[…]

(エル・ヴェ・シチェルバ, ロシア語の品詞について, 論文集《ロシア語》新版, II, レニングラード《アカデミヤ》, 1928年, 6頁)しかしながら、この原則が常に必ず徹底して遵守されているわけではない。最近出版され

たアー・イ・イスカコフ[A. И. Искоков]の論文には, わがテュルク諸言語文法において品詞が十分に明確に分類されていない基本原因が, 「テュルク諸言語において「それには無い範疇」を「強要」することと, 「この言語を他の言語のプリズムを通して」 「観察」することにある」と正当にも指摘している。[...]慣習的な文法の図式, 規格化された分類は, 文法学者をして研究する言語の特殊性, 固有性, 独自性を究明することの妨害をもたらした(場合によっては, 今もなお妨害つづけている)。(ヴェ・アー・アウロリン, エル・アー・ブダゴフ, ユ・デー・ジェシリエフ, ベー・アー・セレブレニコフ, エ・イ・ウブリャトワ, エン・ユ・シュヴェドワ, 叙述文法編纂の諸問題, 雑誌《言語学の諸問題》^①1953年, 第4号, 朝鮮語翻訳《ソヴィエト言語学の諸問題》平壤, 1954年, 226~228頁)

続いて, 品詞分類の原則について次のように指摘している。

品詞の区別, 分類においては一定の諸特徴の総合に依拠しなければならない。すなわち, (1)単語の一般化された意味-文法的な意味, (2)一連の文法的範疇とこれに対応する単語の形態体系, (3)該当する分類の諸単語の単語造成手段の体系, (4)単語の統辞論的機能。この表徴の相互関係は各言語によって異なる。しかしまさにそれぞれの個別的言語におけるこれらの表徴を考慮する基礎のうえにおいて, 各言語の品詞体系が区別されるのであって, これは親族的な諸言語の品詞体系と必ずしも一致しないのであり, 非親族的な言語のそれとはなおのこと一致しない。(同上書, 229頁)

これと同一の品詞分類の原則は, ソ連科学院編纂《ロシア語文法》においても見られる。

ロシア語においては単語が, その基本的意味の点において, それぞれの部類に連結した文法的範疇の性格の点において, また単語造成と形態造成の種類の点において, 区別される部類として区分される。この部類は品詞とよばれる。品詞はまたそれが連鎖する言語行為において果たす機能の点で区別される。(ソ連科学院編纂《ロシア語文法》第1巻^②, モスクワ, 20頁)

また次の叙述においても, 品詞分類の原則は同一となっている。

^① В. А. Аврорин, Р. А. Будагов, Ю. Д. Дещериев, Б. А. Серебrenников, Е. И. Убрятова, Н. Ю. Щелова, «Вопросы составления описательных грамматик», *Вопросы языкознания*, 1953-4. 同論文の朝鮮語訳は, 金壽卿らが編んだ翻訳論文集に収録された (『쓰웨트 언어학의 제 문제: 번역 논문집』 조선 민주주의 인민 공화국 과학원, 1954.)。

^② *Грамматика русского языка: Фонетика и морфология*, Изд-во Академии наук СССР, 1952.

ロシア語における品詞は、単語として表現される意味の点において、それに固有の形態論的標識と文法的範疇の点において、形態造成と単語造成の種類の点において、単語結合と文章内におけるその統辞論的機能の点において区分される、単語の語彙-文法論的な部類である。こうしてそれぞれのロシア語の品詞は、一定の語彙-文法論的意味をもちながらも、それに固有の形態論的特性と単語造成的類型としての特徴を示し、一定の統辞論的役割を遂行する。(モスクワ総合大学編纂《現代ロシア語形態論》36頁)

しかし、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ〔В. В. Виноградов〕は、全体の品詞を同一の平面上で見ることができないのであって、単語の基本的種類のあいだに一般的な構造的差異を考慮しなければならないと強調しながら、品詞の区画に先立って、単語の基本的な構造-意味論的類型を規定している。

こうして、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフは単語の意味的構造を分析した結果、単語の基本的な文法-意味論的範疇として次のような4種類の類型を区分している。

I. 命名的単語の範疇。これに属する単語は、すべて命名的機能をもっており、対象、過程、性質、標識、数量的関係、現実の産物、標識と過程のあいだの状況的、性質-状況的規定と関係を反映する。こうした諸単語は、言語行為の対象-意味的、語彙的および文法的土台をなすものであり、この部類の単語については「*chasti rechi*」(品詞)という用語を適用するのが適当である。この部類の単語をポテブニャー〔А. А. Потребня〕は「語彙的単語」(*leksicheskie slova*)、フォルトゥナートフ〔Ф. Ф. Фортунагов〕は「完全な単語」(*polnye slova*)と呼んだ。

II. 連結的、補助的単語の範疇。これに属する単語は命名的機能をもたない。こうした諸単語は、ただ命名的単語を通じてのみ現実世界と関係を結ぶことになり、原因、時間、空間、目的等々の存在の関係の最も一般的で抽象的な範疇を反映する。この部類の単語については「*chastitsy rechi*」(小品詞)という用語を適用するのが適当である。この部類の単語をポテブニャーは「形式的単語」(*formalnye slova*)、フォルトゥナートフは「部分的単語」(*chastichnye slova*)と呼んだ。

III. 様態的単語の範疇。これに属する諸単語も、連結的単語と同様に命名的機能をもたない。しかし大部分は連結的単語と同程度に形式的、言語的手段の分野に属することはなく、連結的単語よりもずっと「語彙的」である。この部類の単語は、文章の成分のあいだの連携や関係を表現するのではなく、文章のあいだに挿入されて現実と言語的表現の手法に対する主体の評価や観点を表す。

IV. 感動詞の範疇。これに属する単語は主体の感情、気分および意志を表すが、それを命名することはない。これらは命名的単語にというよりは表現上の身ぶりに近い。感動詞は、これを

「文章に対等なもの」と呼ぶことができる。

こうしてヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフは、現代ロシア語において、1)命名的単語あるいは品詞、2)連結的単語あるいは小品詞、3)様態的単語、そして4)感動詞の4種類の基本的な構造-意味論的単語の範疇を区分し、さらに品詞はこれを1)名詞、2)形容詞、3)数詞、4)代名詞、5)動詞、6)副詞、7)状態の範疇に、小品詞はこれを1)助詞、2)繫辞(コピュラ)、3)前置詞、4)接続詞へと細分化している(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ《ロシア語、単語に関する文法的理論》^①モスクワ、1947年、28-31、42-44頁参照)。

以上見たような、単語の範疇をまず基本的な構造-意味論的な類型によって区分し、これをさらに従来の品詞分類に分けるヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフの試みは、今後、朝鮮語の単語分類問題を考察するうえでも一定の示唆を与えるものと信じている。

品詞分類の原則的問題に関連して、品詞を意味論的品詞と無意味的品詞に区別しようという一部の態度に対して警告を与えているエル・アー・ブダゴフの次のような叙述は、われわれに少なからぬ教訓となる。

すべての品詞をしばしば有意味的品詞と無意味的品詞に分ける、広く普及した観点は、われわれにとって正しくないと考える。[...]前者のグループには、たとえば名詞、形容詞および動詞を所属させ、後者のグループには代名詞、前置詞、接続詞を所属させている。こうした主張はどう考えても正当ではない。なぜならば、そうした主張はあたかも言語には何をも意味しない(「無意味的な」)独特の「空っぽの」品詞が存在しているかのような印象を与えるからである。だが現実的には前置詞や接続詞のような品詞は、単語の結合や文章全体の体系において重要な文法的機能を遂行するのであって、またそうすることによってそれ自体が特殊な文法的意味、文法的有意義性を獲得することになる。したがって、これらもまたそれ特有の方式において有意義的なのである。(エル・アー・ブダゴフ《言語学概要》135頁)

すでに述べたように、一部の言語学者が実施した、また実施している有意味的品詞と無意味的品詞への品詞の区分は妥当なものとはいえない。それぞれの品詞はそれ特有の方式においてつねに有意味的である。そのため有意味的品詞と無意味的品詞について云々するよりは、より自立的な品詞とより自立的でない品詞について述べる方が正当であろう。(同上書、189-190頁)

^① В. В. Виноградов, *Русский язык: Грамматическое учение о слове*, Гос. учебно-педагог. изд-во Министерства просвещения РСФСР, 1947

IV

朝鮮語品詞分類に関しては、これまで数多くの学者によるさまざまな学説が存在していることは、よく知られているところである。ここで筆者の意図は、それらさまざまな学説を歴史的にまたは相互に比較し、分析・批判するところにはない。ただ筆者が暫定的に設定した品詞分類をそのまま認め（金壽卿《朝鮮語文法 語音論・形態論》初級中学校第1・2学年用^①, 教育図書出版社, 1954年, 99頁以下参照）、朝鮮語の品詞を1)名詞, 2)数詞, 3)代名詞, 4)形容詞, 5)動詞, 6)冠詞, 7)副詞, 8)吐および9)感動詞に分けると同時に、朝鮮語の単語の基本的な構造-意味論的類型として、4種類の分類を設定する。この4種類の分類は、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフがロシア語で設定した4種類の分類と、その区分の観点が同一ではない。だが、ある点において、それと対比して見ることができる。ここでその4つの分類とは次のとおりである。

朝鮮語単語の分類

1. 第1部類——名詞(数詞, 代名詞), 形容詞, 動詞

これに属する単語は実質的、語彙的意味として充満している。言語行為においては、それ自体のみで登場することは稀で、常に文法的意味をもつ吐と必ず合わさってのみ表れることになる。これに属する品詞は、それに内属する文法的範疇を吐の助けを得て表現することが多く、また吐の助けを得てはじめて文章のなかで一定の成分となりうることが多い。

2. 第2部類——冠詞, 副詞

これに属する単語は、語彙的意味とともに文法的意味までも兼ねて内包している。いってみれば、第1部類と第3分類が1つに合わさったようなものである。したがって、この部類に属する単語は、他のものの助けを得ることはなく、それ自体によってもちゃんと文章のなかで一定の成分となりうる。

3. 第3部類——吐

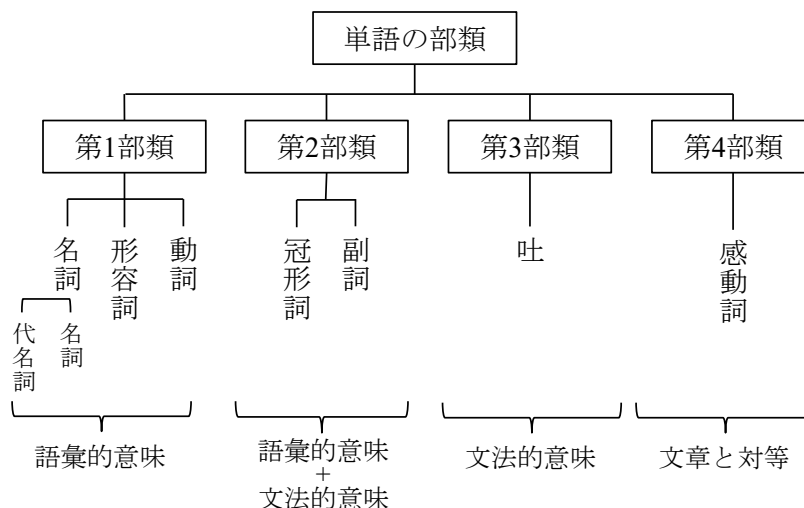
これに属する単語は、ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフのいう連結的、補助的単語に該当するものであり、それ自体の語彙的な意味はもたず、ただ文法的意味のみをもつ。言語行為において、それ自体だけで表れることはほとんどなく、常に第1部類の単語に同伴して表れる。

4. 第4部類——感動詞

ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフがロシア語で設定した第4部類と同一である。

^① この教科書は、朝鮮語文研究会『조선어 문법』(1949)を基礎としながら、スターリン言語学論文(1950)を受けて編纂されたものである。その間に金壽卿は、吐の二重的性格とその考えにもとづく文法書の編成を発想するにいたったようで、それがまず1954年の教科書として形になり、それを理論化したのが本論文ということになる。

以上の単語の部類を図式で表せば、次のとおりである。



この図式において最も問題となるのが、第1部類の単語と第3部類の単語とはほぼつねに相互に合わさって表れるのにもかかわらず、換言すれば第3部類とは結局屈折語における語尾に該当するものであると考えられるにもかかわらず、何ゆえこのようにこれらを別の2つの部類に分け、《吐》という品詞を設定したのか、という問題である。

朝鮮語の品詞分類論における品詞としての吐に関する各種の見解に対する批判的考察はここでは省略することにし、ただ朝鮮語形態論において吐という品詞を設定すべき必要性がどこにあるのか、という筆者の見解のみを論証することとどめたい。

V

そのためには、まず吐の概念を確定することが必要である。

アー・アー・ホロドヴィチ[A. A. Холодович]は朝鮮語の単語の構造において、次のような8つの形態素を区分している(A.A.ホロドヴィチ《朝鮮語文法概要》^①モスクワ, 1954年, 14頁)。

- 1) 語根(koren')
- 2) 接頭辞(prefiks)
- 3) 単語造成の接尾辞(suffiks slovoobrazovaniia)

^① A.A. Холодович, *Очерк грамматики корейского языка*, Изд-во лит-ры на иностранных языках, 1954. 同書は、菅野裕臣による日本語訳がある。「朝鮮語文法概要」(上)・(下), 『韓國語學年報(神田外語大学)』5・6, 2009, 2010.

- 4) 単語変化の接尾辞 (suffiks slovoizmeneniâ)
- 5) 単語変化の可動的接尾辞 (podvizhnoisuffiks slovoizmeneniâ)
- 6) 単語的接尾辞 (suffiks-slovo)
- 7) 吐 (okonchanie)
- 8) 結合的または連結的形態素 (soedinitel'haia, ili sviazuiushchaia morfema)

この 8 種の形態素のうち, 1)語根と 2)接頭辞に関しては特別な説明を要しないであろう。3)以下の形態素について, アー・アー・ホロドーヴィチの説明を聞けば次のとおりである(ここでは必要な限度内において, その要旨を記録する)。

単語造成の接尾辞

単語造成の接尾辞とは, 新たな単語を造成する形態素のことをいう。

単語造成の接尾辞は 2 つの部類に分かれる。

- a) 1 つの品詞を他の品詞に変える接尾辞。
- b) 1 つの品詞を他の品詞に変えるのではなく, ある補充的な意味を添加し, 同一の品詞内部において独特の単語の部類を造成する接尾辞。

最初の部類の接尾辞は, どのような品詞をそれが造成するのかによって, 4 つのグループ(名詞的, 動詞的, 形容詞的, 副詞的)に分かれる。

I) 名詞的接尾辞

動詞から——例:接尾辞 개: 날다 [飛ぶ] → 날개 [翼]

形容詞から——例:接尾辞 이: 길다 [長い] → 길이 [長さ]

II) 動詞的接尾辞

形容詞から——例:接尾辞 이: 높다 [高い] → 높이다 [高める]

III) 形容詞的接尾辞

動詞から ——例:接尾辞 엽, 울, 읍: 웃다 [笑] → 우습다 [おかしい], 믿다 [信ずる] → 미답다 [信ずるに足る]

名詞から——例:接尾辞 적 [的]: 영웅 [英雄] → 영웅적 [英雄的]

IV) 副詞的接尾辞

名詞から——例:接尾辞 이: 날 [日] → 나날이 [日に日に]

形容詞から——例:接尾辞 이: 높다 [高い] → 높이 [高く]

接尾辞 히: 속하다 [速い] → 속히 [速く]

動詞から——例:接尾辞 어, 우: 넘다 [こえる] → 넘어 [こえて], 너무 [あまりにも]

2 つ目の部類の接尾辞は, 1・2 個の例外を除いては, 名詞から名詞を造成する接尾辞である。

そのうち一部の接尾辞は, 人物の意味をもつ。例:

a)接尾辞 자[者], 가[家], 사[士], 군[~の仕事を職業とする人], 부[夫], 쟁이[~の人; 軽く見る感じが込められる]: 로동 [労働] → 로동자 [労働者], 작곡 [作曲] → 작곡가 [作曲家], 조각 [彫刻] → 조각사 [彫刻士], 나무 [木] → 나무'군 [木こり], 채탄 [採炭] → 채탄부 [採炭夫], 양복 [洋服] → 양복쟁이 [洋服を着た人]

b)接尾辞 치[~のやつ]: 서울 [ソウル] → 서울치 [ソウルっ子], 시골 [田舎] → 시골치 [田舎者]

他の一部の接尾辞は抽象的行動の意味をもつ。

例:接尾辞 질: 톱 [のこぎり] → 톱질 [木挽き], 바늘 [針] → 바늘 [針仕事]

特別のグループをなすものとしては, 本来の単語に主観的-文体論的ニュアンスを付与する, いわゆる様態-名詞的接尾辞がある。例:

a)○をもつ接尾辞 둥이, 똥이, 툽이, 승이, 충이, 강이, 맹이, 뱅이, 앙이, 랑이: 배 [腹] → 배둥이 [ぶっくりした腹], 꼬리 [尾] → 꼬랑이 [しっぽ]

b)ㄹをもつ接尾辞 아리, 어리, 거리, 머리, 시리, 다리: 등 [背] → 등어리 [背中]

c)ㅓをもつ接尾辞 애기, 재기, 때기, 서기: 배 [腹] → 배때기 [どてっ腹]

(同上書 24-26 頁参照)

単語的接尾辞

単語的接尾辞とは, 形態(外観)をもった単語造成の接尾辞をいう。単語的接尾辞が固有の意味の接尾辞と区別されるのは, それがさらに構成部分に, 少なくとも語根と吐へと区分できる点にある。たとえば単語的接尾辞 거리다 [しきりに…する] は語根 거리 と吐 다 に区分される。単語的接尾辞が単語と区別されるのは, それが自立的な力点をもっておらず, 結合されることになる語根から絶対に分離できない点にある。たとえば, 単語 반작거리다 [きらきらする] のなかにある 거리다 は語根 반작 からは分離できない。

単語的接尾辞の例:

대다: 반작반작 [きらきら] → 반작대다 [きらきらする]

롭다: 해 [害] → 해롭다 [害になる]

다랗다: 길다 [長い] → 길다랗다 [思ったより長い]

속속하다: 붉다 [赤い] → 붉으속속하다 [赤みがかっている] (同上書 26-27 頁参照)

単語変化の接尾辞

単語変化の接尾辞とは, 吐と同様に, 単語の文法的意味を表現するのに服務する形態素を

いう。

吐との差異点は、この接尾辞が単語の統辞論的機能と関連のない、文法的意味を表す点にある(たとえば、動詞の相^①は、その動詞が述語なのか、規定語なのか、補語か、または何らかの他の文章成分なのかということとは関係がなく、名詞の尊称の範疇はその名詞が主語か、補語か、規定語なのかあるいはどのような他の文章成分なのかということとは関係がない)。単語の統辞論的機能と連結しない、こうした文法的意味と範疇を、今後、非位置的(nepozitsionny)と呼ぶことにする。

単語変化の接尾辞は吐に先だつものであり、名詞的、動詞的および形容詞的接尾辞に区分される。

単語変化の名詞的接尾辞の範疇は数が多くない。これは主に評価的接尾辞である。

例. 尊称の接尾辞 님: 형 [兄] → 형님 [兄貴]

単語変化の動詞的接尾辞は次のように区分される。

a) 相の接尾辞。例 리: 불다 [呼ぶ] → 불리다 [呼ばれる]

b) 時称の接尾辞。例 았: 보다 [見る] → 보았다 [見た]

c) 法^②の接尾辞。例 겠: 오다 [来る] → 왔겠다 [来たであろう], 오겠다 [来るだろう]

d) 尊敬の接尾辞。例 시: 알다 [知る] → 아시다 [ご存知だ]

単語変化の形容詞的接尾辞は、a)時称の接尾辞、b)法の接尾辞、c)尊敬の接尾辞に区分される。これらの接尾辞は基本的に動詞的接尾辞と一致し、たとえば動詞であれ形容詞であれいずれも同様に過去の接尾辞았, 었をもつ。しかし現在の接尾辞는, 는は、ただ動詞にのみありうる。

同一の単語にいくつかの単語変化の接尾辞がありうる。たとえば、動詞は相(2つの相まで可能:使役態と受動態)、時称、法などを同時にもつことができる。朝鮮語では、これらの接尾辞が常に厳格に規定された順序で配列される。1. 使役相[使役態]の接尾辞+2. 被動相[受動態]の接尾辞+3. 尊敬の接尾辞+4. 時称の接尾辞+5. 法の接尾辞。(同上書, 27-28頁)

単語変化の可動的接尾辞

単語変化の可動的接尾辞は、普通の単語変化の接尾辞と同一の機能を遂行しながらも、それとは異なり、一定の自立性と文章内での若干の移動の自由をもっている。この範疇の形態素には、たとえば、複数の接尾辞들が属する。학생들[学生たち], 일 잘들 하여라[みんな仕事をちゃんとやれ], 어디로들 가시오?[みなさん、どこに行かれるのですか], 어서들 이리와[さあみんな、こっちに來い], 외들? [みんな、なぜ?] (同上書, 28-29頁)

^① ここではヴォイスの意味で「相」との漢字語を当てている(日本の古い文法書と同じ)。現在は一般的にヴォイスに「態」の字を当て、「相」はアスペクトに当てているが、ここでは金壽卿の訳語をそのまま残す。

^② ここで金壽卿はモダリティに「法」の字を当てているようである。

吐

吐とは、単語変化の接尾辞と同様に、文法的意味(範疇)を表現することに服従し、新たな単語を造成しない形態素をいう。単語変化の接尾辞との差異点は、吐が文章において単語の統辞論的機能と関連を結んでいる文法的意味を表す点にある。たとえば、動詞の規定語形——これは主に名詞の前にのみくることができ、名詞の主格形——これはただ名詞が主語かあるいは繫辞と連結された成分(繫辞 되다, 아니다 の前で)である場合にのみ表れる。単語の統辞論的機能と連結されている、こうした文法的意味と範疇を今後、位置的(*pozitsionny*)と呼ぶことにする。(同上書, 29頁参照)

結合的あるいは連結的形態素

この形態素は、語根を接尾辞あるいは吐と連結させたり、あるいは接辞どうしを相互に連結させることに服従する。この形態素としては「으», 「아», 「어」がある。

(同上書, 31-32頁参照)

アー・アー・ホロドーヴィチが設定した以上のような8つの形態素のうち、5)単語変化の可動的接尾辞は、4)単語変化の接尾辞の変種であり、6)単語的接尾辞は3)単語造成の接尾辞の一種であると、それぞれ見ることができるので、これらを特別にそれぞれ設定する必要はない。8)結合的あるいは連結的形態素のうち、「아», 「어」は吐の1種類であり、「으」は結合母音に過ぎず、有意味的な形態素と呼ぶことができないため、これらを結合的あるいは連結的形態素と設定するのは困難である。したがって朝鮮語の形態素としては、

1)語根, 2)接頭辞, 3)単語造成の接尾辞, 4)形態造成の接尾辞, 5)吐
の5種類を設定するのが適切であろう。

ここで、アー・アー・ホロドーヴィチが形態造成の接尾辞と吐とを区分したのは、実に注意すべきことである。筆者を含む一部の朝鮮語研究者のあいだでこの2種類の区別にとりたてて注目を向けていなかっただけに、その意義は大きい。アー・アー・ホロドーヴィチが、単語の統辞論的機能と結びついて文法的意味を表すのか、あるいはそうではないのか、という観点から出発し、吐と形態造成の接尾辞とを区別し、「位置的」および「非位置的」という概念を導入したことに対して、筆者は現在、完全に同意を表明する。したがって吐という概念のなかには、相、時称、尊敬等を表す 리, 있, 있, 시等は含まれず(これらは形態造成の接尾辞である)、ただ格、法、階称[待遇]等を表すもののみが含まれることになる(있, 있, 있, 시等については、かつて周時經、^{チュンギョクン キムドッボン}金料奉先生らも、これを吐とは見なかった)。

したがって、一部の学者が「吐」という用語の代わりに、「接辞」という用語を使用しているのは妥当でない用語の使用法であると言わざるをえない。「接辞」という用語は *affiks* の翻訳語であり、*affiks* は原則的に「接頭辞(*prefiks*)」、「接尾辞(*suffiks*)」、「挿入辞(*infiks*)」を意味し、広くは「屈折語

尾あるいは吐」(fleksiiaあるいは okonchanie)まで含んで表れる。すなわち、「接辞」という用語は、単語において語根以外の部分を指す、極めて包括的な用語であって、その1つ1つの部分を分析的に考察しなければならないいわれわれにとって、言語行為において厳格に規定された1部分である吐を表すのに、そうした用語を使用することはできない。換言すれば、吐に接辞的性格が含まれているという事実から、吐に接辞だという名称を付与するのは妥当だとは見がたいのである。

次に、形態造成の接尾辞と吐がいずれも文法的意味(範疇)を表現するのに服務しているという共通点のみを念頭において、これらをいずれも1つの「吐」という名称の下に包括できないことは、ただ次のような実例に照らしてみてもすぐに分かる。すなわち、名詞、形容詞、動詞の未定形を表す「-로(임, 음)», «-기», «-지»を形態造成的接尾辞とみなしなければならないことは、誰も取り立てて異議がないであろう。しかし、この«-로», «-기», «-지»の前に、相, 時称, 尊敬などを表す리, 았, 겠, 시などがくることがある。この形態素を吐と見る見解によれば、たとえば, «남기시였음을 [お残しになったことを]», «들리시였겠기에 [お聞こえになったであろうことに]», «보이시지를 [ご覧になれるかを]»等々の表現を:

남	기	시	였	음	을	,	들	리	시	였	겠	기	에	,	보	이	시	지	를
語	接		接				語	接		接		接			語	接	接	接	
根	尾	吐	尾	吐			根	尾	吐	吐	吐	尾	吐		根	尾	吐	尾	吐
	辞		辞					辞				辞				辞		辞	

と解剖することになり、吐が接尾辞の前にくることで単語の構成上の矛盾をもたらさざるをえない。

そこで:

남	기	시	였	음	을	,	들	리	시	였	겠	기	에	,	보	이	시	지	를
語	接	接	接	接			語	接	接	接	接	接			語	接	接	接	
根	尾	尾	尾	尾	吐		根	尾	尾	尾	尾	尾	吐		根	尾	尾	尾	吐
	辞	辞	辞	辞				辞	辞	辞	辞	辞				辞	辞	辞	

のように、これらの形態素をすべて接尾辞と見ないわけにはいかない。

VI

吐の概念を以上のように規定するならば、われわれは意味論的、形態論的および統辞論的な諸

側面において吐がもっている独自性を考察することができるようになる(単語造成的な側面だけは、他の品詞と同じように吐で論議するのは困難である)。

第一に、意味論的に見て吐が一定の意味の自立性をもっていることは、既に上で膠着語における形態素、特に接辞が一定の自立性と有意味性をもっている事実を考察したことに照らし、当然に理解しうる。実際、朝鮮語の吐が有する意味の多様性は、吐によって表現される内容がヨーロッパの諸言語における屈折語尾、接尾辞、副詞、接続詞、前置詞、助詞などで表現されるという事実から十分に証明しうる。

第二に、吐が一定の統辞論的機能をもっており、吐と合わさって表される単語が文章のなかでどのような成分になるのかを示していることは、あらためて説明する必要もない。

第三に、吐が形態論的に一定の文法的範疇を表しており、膠着語としての朝鮮語の特質上、吐を別途取り分けて区画することができることは、再言を要しない。

しかし、特に吐の形態論的機能に関連して指摘しなければならないことは、朝鮮語の吐は名詞(数詞、代名詞を含む)、形容詞、動詞に共通して用いられるという事実である。この点がまさに膠着語に属する諸言語のなかで、朝鮮語がもっている特異な点であるといわざるをえず、まさにこの点において、「単語の変化と、文章における単語の結合の基礎にある一般的なものをとりだし、それによって文法的規則や文法的法則をつくる」というイ・ヴェ・スターリンの指示を根拠として、吐を1つの品詞として別に分けることになるのである。すなわち、

소[牛](名詞)	고, 며, 거니와, 든지, 지마는, 니까, ㄹ망정(였)구나, 지요, ㅂ니다, 더라, 던가...
희[白[い]](形容詞)	고, 며, 거니와, 든지, 지마는, 니까, ㄹ망정(였)구나, 지요, ㅂ니다, 더라, 던가...
되[な[る]](動詞)	고, 며, 거니와, 든지, 지마는, 니까, ㄹ망정(였)구나, 지요, ㅂ니다, 더라, 던가...

のように、

A x

B x

C x

の形式となっているわけで、ここで共通している x を取り出して分けることは、文法的抽象、文法的一般化の原則に付合すると言える(以上からも、吐の共通性は明白に分かるが、吐の全般的な状況を知るためには、金壽卿《朝鮮語文法、初級中学校第 1,2 学年用》227-234 頁を参照。もちろん品詞によって吐のあいだに若干の差異はあるものの、これを全体的にみれば、極めて微少な比率しか占めていない)。

したがって、仮に朝鮮語の動詞に時称、法、階称等の範疇を表す文法的形態があるとすれば、

まさにそれと同一の文法的表現手法が形容しにもあり、また名詞にもあるといえる(相と態の範疇だけは、その意味上、動詞にのみ固有であることは当然のことである)。別の言い方をすれば、時称を表す接尾辞、法と階称を表す吐は、朝鮮語の動詞、形容詞、名詞に共通して適用され、また一方、格の範疇は基本的に名詞にあるが、形容詞や動詞においてもその未定形には格吐を付けることができる(«아름다움이»[美しさが], «아름다움을»[美しさを]; «가기가»[行くことが], «가기에»[行くことに]…)。

朝鮮語の言語現実がかかるものであるにもかかわらず、一部にはどうして時称や法(あるいは階称)の範疇が名詞にありうるのか、という疑惑を抱く者のもいる。これに対しては、名詞として表現される対象それ自体が一定の時間的關係または法的關係のなかに置かれているからそうした表現方法が可能なのだという点は深入りせず、ここではただそうした範疇が一般言語学的に名詞にもありうるのであり、また実際そのような場合が言語のなかには存在することを、次の引用文によって証明することにまとめておきたい。

インド・ヨーロッパ諸言語においては、この範疇(すなわち法の範疇)が主として動詞にあるが、他の体系の言語には法の範疇が名詞によっても、また各種の単語結合によっても表現されうる。(エル・アー・ブダゴフ《言語学概要》199頁、傍点は引用者)

実際、時称の文法的範疇は、時間上で行動が進む独特の方式を示すものであり、広範には動詞にあるものである。しかし、若干の諸言語においては、時称の範疇が動詞だけでなく、名詞にも固有のものでありうることを念頭におかなければならない。[ペー・カー・ウスラル, アブハジア語, カフカースの民俗^①, 1887年, 17頁参照](同上書 193-194頁, 傍点は引用者)

時称の文法的範疇とは、動詞として表現される(若干の言語では一般的に述語によって、名詞的な述語によっても表現される)行動や状態と話が進行している瞬間との関係である。[...]時称の範疇はきわめて多くの言語に現れるものであり[...]、時間相の各種關係が個別的な単語の変化のうえに、単語または単語結合の形態のうえに(動詞だけでなく、名詞であつてもよい)表現されるかぎり、この範疇は存在するのである。(ソビエト大百科事典, 第2版, 第12巻, 425頁, 「文法」項目の記述。傍点は引用者)

次に問題となるのは、名詞が子音で終わる場合に吐の前に差し込まれる«이»の問題である。たとえば、

말이고, 이며, 이거니와, 이든지, 이지마는....

こうした«이»をどう見るかという問題において、これを有意味的な形態素とみて、さらには1つの品

^① П. К. Услар, *Этнография Кавказа. Языкознание. Абхазский язык*, Тифлис, 1887.

詞(「指定詞」あるいは一種の動詞)とみる見解がある。そう見るならば、時称、法、階称等の範疇は、この«이»という品詞に属するものであり、名詞に属するものではないという見解が出てくる。しかし筆者はそうした見解は誤りであり、したがってまさに時称、法、階称の範疇を名詞に所属させることができると考えている。

崔鉉培^{チェヒョンベ}は、この«이»を「指定詞」という品詞の語幹とみて、次のように書いている。

私の考えによれば, «이다»の«이»が, 母音の下ではときどき省略されて出現しないこともあるが, その意味という点では«이»が重要なのである。すなわち«이»は用言の語幹であり, «다»はただそれを終わらせる語尾に過ぎないのである。

だとすれば«이다»はどのような品詞なのか? これは[...]何ら実質的な考えはなく, ただ述語になる力をもつ形式用言なので, 体言の下に付けられてその体言とともに文章の述語となるのである。だが, その上の体言が子音で終わるか母音で終わるかにかかわらず, それが入ってはじめて述語となるのである。こうした主張の理由は, およそ次のとおりである:

a) 体言はそれだけでは文章の述語となる力をもっていない。述語になる力は用言のみがもっているからである。したがって体言が述語になるためには, 必ず述語力をそなえた用言を要する。たとえば,

저 집이 학교이다. [あの家が学校だ]

그것이 금이다. [それが金だ]

で, 体言«학교»[学校], «금»[金]が用言«이다»を待っており, その文章の主語にとっての述語となっているのである。この用言«이다»がなくては, 「学校」も「金」も用言になれないのである。もちろんある場合には, この用言«이다»がまったく省略されることもないわけではないが, そのときにはただ表面的に«이다»が現れ出ていないというだけであって, その内面には«이다»があるものと理解されるのである。たとえば,

너는 직녀, 나는 견우, 일년 일차 서로 보니.. [私は織り姫。私は牛飼い。1年1度一緒に会う。]

において, «직녀»[織り姫]と«견우»[牛飼い]が表面的には何ら他の用言を付けなくても, その上の主語の述語になっているが, 実際のところは, その下に指定詞«이다»が無形ながら入っているものと解釈しなければならない。もしそう考えずに, すなわち«이다»を補充して解釈しない場合には, どうてい織り姫や牛飼いはその上の主語の用言にはなりえない。したがって«이다»を補充して解釈されない言葉では, どうていその体言だけではその上の主語に対する述語になりえない。[...]

b) «이다»の語幹«이»が表面的には省略される場合にも, そのなかでは, 暗々裏の存在を認

めなければどうい語法的な解釈をすることができないのである。[...]必ず「이」を, 精神的であつても, 補充して考えてはじめてその意味が通じ, その法が可能になる。(崔鉉培《우리말본 [ウリマルボン]》1937年, ソウル, 209-212頁)

以上の叙述のなかで, 「体言はそれだけでは文章の述語となる力をもっていない」, 「どうい体言だけではその上の主語に対する述語になりえない」という表現に見られるように, 崔鉉培は名詞が絶対に述語にはなりえないと主張している。しかし一般的に名詞が述語になりうること, 実際に名詞が述語になった文章が存在していることは, 一般言語学の初歩的な常識に属する事実であり, ただ次のような文章を1つ2つだけあげても, その事実を証明するに十分であろう。

祖国保衛の任務は公民の最大の任務, 最大の榮譽。

労働党の組織的, 思想的強化はわれわれの勝利の基礎。

次に崔鉉培は, 「ただ表面的に「이다」が表されていないというだけであつて, その内面には「이다」があるものと理解されるのである」, 「「이다」を補充して解釈しない場合には」, 「必ず「이」を, 精神的であつても, 補充して考えてはじめて」等の表現から垣間見られるように, 言語のなかに現実的にあるものをそのまま正確に明らかにしようとするのではなく, ある主観的な観点から出発し, その要請にしたがって現実を歪曲して観察しようと試みている。崔鉉培のこうした態度に反駁を加えるためには, ただ次のようなエンゲルスの言葉を引用することでも既に十分であろう。

唯物論的な世界観は, いかなる外部的補充もなく, 自然界を単純にあるがままに認識することを意味する。(《マルクス・エンゲルス全集》ロシア語版, 第14巻, 651頁)

「이다」の問題について, アー・アー・ホロドーヴィチは次のように書いている。

若干の言語学者は, 名詞においても結合的な形態素があると考えている。ちょうど述語の位置に立った名詞の後にくる「이」を, こうした結合的な形態素と考えている。しかし, そのときかれらは, 結合的な形態素が2つの異なる形態素を連結しながら, それ自体は意味をもっていない要素であるということを忘れている。しかし「이」は, 第1に, 単語の(この場合は名詞の)部分ではなく, 第2に, それが一定の意味をもっているという点で, すなわち先行する名詞の述語的性格を指摘し, そのことによってヨーロッパ諸言語の繫辞に相当するものであるという点において, 結合的な形態素とは区別される。(アー・アー・ホロドーヴィチ, 《朝鮮語文法概要》36頁)

ここで念頭に置かなければならないことは, 繫辞「이다」の語根「이」は, 母音で終わる語幹の後では通常脱落するという事実である(例外——過去形では「이」が時間の接尾辞と絡まって「이었」が

«였»となる)。 (同上書, 124頁)

終声が母音である名詞の後には繫辞の語根«이»が普通脱落し, したがって«이며»は«며»となる。例: 그는 학자며 작곡가이다. (同上書, 263頁)

現在と未来の時称においては, 繫辞の語根«이»が脱落し, 過去の時称では繫辞の語根 i (이)が y(半母音の이)に転化する。例:

現在時称: 노(이)다 [ひもである]

過去時称: 노였다 [ひもであった]

未来時称: 노(이)겠다 [ひもであろう] (同上書 245頁)

述語——これは動詞と活用形容詞の統辞論的機能である。名詞, 数詞, 非活用形容詞および若干の副詞は, それ自体だけでは述語を成さない。これはただ繫辞とともにのみ述語の形成に参与し, このとき繫辞をもつ成分の資格として述語の構成のなかに入っていく。こうして述語に 2 つの基本的類型——単純述語と複合述語が区分される。単純述語とは, 動詞あるいは活用形容詞として成立する述語をいう。たとえば, 文章«비가 온다»[雨がふる]における«온다»[ふる]のようなものである。

複合述語とは, 繫辞をもった成分として用いられる名詞(あるいは代名詞), 数詞, 非活用の形容詞および若干の副詞と繫辞(動詞的繫辞)がその構成のなかに入る述語をいう。たとえば, 文章«인간은 사회적 동물이다»[人間は社会的動物である]における«동물이다»[動物である]のようなものである。[...]繫辞は抽象的繫辞と非実質的繫辞に分かれる。抽象的繫辞では肯定的な«이다»と否定的な«아니다»がある。抽象的繫辞は動詞の体系で独特の位置を占める。この独特の位置は, これらの繫辞に固有の位置的および非位置的な範疇の若干の特性によって規定される。これらの特性のうち最も重要なものをあげれば, 次のとおりである。

位置的範疇:

- a)終結述語の範疇のうち断言法(«미», «로세»のようなもの)の命令-勧誘法がない。中立-直説法の吐は動詞のこの法に固有の吐と完全には一致しない。
- b)繫辞の形動詞形は, 名詞に対する関係の属性的性格を指しながら, ただ 1 つの意味だけをもっており, 時間を表すことはない。吐は«ㄴ»の 1 つのみであるが, 特殊な条件においては, 別言すれば, 不確信性のニュアンスがある場合, あるいはいくつかの補助的な名詞と助詞の前では«ㄴ»の代わりに吐の«ㄹ»が使われる。
- c)副動詞形の体系が不完全である: 先行, 動詞, 目的, 結果的, 多回-分離的, 意図, 行動の様式などの副動詞形がない。結合的副動詞形としては, «고», «며»のほか, 否定的繫辞では吐«라»が使われ(«아니라»), 肯定的繫辞では吐«요»が使われる(«이요»)。

非位置的範疇:

- a) 転移性-非転移性(他動-自動)と相の範疇がない。
- b) 絶対的時称のみがあり, 相対的時称がない。現在時称は消極的形態素として表現され, 接尾辞«는/니»はない。
- c) 「行動の手法」(態)の文法的範疇がない。
- d) 様態性の範疇が不完全である。たとえば意図, 試み, 願望の範疇はまったくないに等しい。(同上書, 243,244,245頁)

以上の叙述に対しては, 次のように述べたい。

第1に, «이»を一部言語学者が結合的形態素と言っているが, これは誤りである。形態素とは一定の意味をもつものであるが, この«이»は何らの意味ももっていないからである。アー・アー・ホロドーヴィチは, この«이»が先行する名詞の述語的性格があると指摘することで, ヨーロッパ諸言語の繫辞と対等であるという意味において, 一定の意味をもっていると指摘しているが, 先行する名詞の述語的性格を指摘することによってヨーロッパ諸言語の繫辞と対等なのは, «이»ではなく, まさに«다», «고», «며»などの述語吐である。それは,

그는 군대다. [それは軍隊である]

그는 학생이다. [彼は学生である]

という2つの文章において, 述語に«이»があるかないかの差異があるが, 文法的には2つの文章に何ら差異はない。「이»のない«그는 군대다»においても«군대»[軍隊]の述語的性格は«다»によって指摘されているのであり, これと同じように«그는 학생이다»でも«학생»[学生]の述語的性格は«다»によって指摘されているが, ただ名詞(학생)が子音で終わっているから, その間に«이»が差し込まれ, «다»がその変種である«이다»になっているだけのことである(«그는 군대다»で«이»が本来はあるのにここでは脱落していると考えた態度は, 言語現実をあるがままに見る観点とはいうことができない)。

第2に, 繫辞の語根«이»がときには脱落し, ときには«半母音이»に転化するというのが, 少なくとも1つの品詞の語根であり, 一定の意味を担当しているといいながら, このようにその「言語的外被」が不安定であるというのはいかなる理由もない。この«이»は, ただ一定の条件によって吐の前に差し込まれている語音論的現象に過ぎないのであり, 今日の«이다», «이고», «이며»は«다», «고», «며»の変種に過ぎない。

第3に, «이»は動詞的な繫辞であり動詞の体系において独特の位置を占めるとし, 動詞と異なる諸点を挙げているのだが, そこに列挙された動詞との差異点とは結局のところ«이»が動詞の体系に入りえないということを証明するのみである。命令-勧誘法, 転移性-非転移性(他動-自動)と相の範疇, 行動の手法(態)の範疇などこそが, まさに動詞を他の品詞から区別する最も重要な標識であるにもかかわらず, そのような性格は全然有していない«이»をどうして動詞に所属させられるだ

ろうか? 結局«이다»は, 動詞に所属させられないという結論が出るのみである。

論理的判断«S is P»がどのように言語的に表現されるかという問題において, 繫辞 is が表現される方式は言語によって異なりうる。ヨーロッパの諸言語においては, 名詞文(名詞, 形容詞が述語となっている文章)においては, 繫辞が別途言語学的に表現されるのが通例であるが(複合述語である), 動詞文(動詞が述語になっている文章)においては繫辞が特に言語的に表現されない(単純述語である)。

朝鮮語においては, 結局, 体言文(名詞が述語となっている文章)においても, 用言文(動詞, 形容詞が述語となっている文章)においても, すべて同様に繫辞の言語的表現を必要とするのが通例であり, このとき言語的表現において繫辞の役割を果たすのが, まさに述語となった名詞, 形容詞, 動詞と合わさる吐«다», «고», «며»などである(소다, 소고, 소며; 희다, 희고, 희며; 되다, 되고, 되며)。したがって, 現代朝鮮語の見知からみたとき«이다», «이고», «이며»の«이»は, 述語となった名詞の語幹が子音で終わった時に吐の前に挿入される結合母音の一種に過ぎない。

周知のとおり, 朝鮮語の結合母音には«이»以外に«으»もある。この2つの間には, 結合母音としての共通点がありながらもまた差異点もあるということを指摘することが必要であろう。

まず, 形態-音韻論的に見たとき, 結合母音«으»は先行する語幹が子音で終わるか母音で終わるかという点と, 後にくる吐の初声がどのようになっているかという, 2つの側面の条件によってその出没が決定される。すなわち, 結合母音«으»が表れるのは, まず先行する語幹が子音で終わり, また後にくる吐の初声が原則的にㄴ(ㄴ, ㄴ等), ㄹ(ㄹ, ㄹ가等), ㄹ(면, ㅁ로等), ㅂ(ㅂ니다等), ㅅ(ㅅ시等), ㅇなどとなっている場合に限られる。したがって, 先行する語幹が母音で終わる場合や, 子音で終わっても後にくる吐の初声がㄱ(고, 거든等), ㄴ(는데, ㄴ다等), ㄷ(다, 데等), ㅅ(소, 습니다等), ㅈ(지요等), ㅇ, ㅁ等となっている場合には, 結合母音«으»が表れない。

結合母音«이»は, 先行する語幹が子音で終わるか母音で終わるかという条件にのみ依存するのであって, 後にくる吐の初声がどのようになっているかということは何ら関係がない。

次に歴史-語源論的に見たとき, 結合母音«으»は, 過去から今日にいたるまで変わらず単純な結合母音的なものであったと考えられる。しかし結合母音«이»は, 本来有意味的な形態素だったと想定することができる。この«이»は朝鮮語において, 語根が子音で終わる場合に名詞を造成する接尾辞, あるいは子音で終わる人名の後に付く接尾辞として広範に使用されている«이», 子音で終わる名詞の主格吐«이», さらに指示代名詞«이»とも一脈の連携があると見なければならぬであろう。すなわち, たとえば«복순 이다»〔福順だ〕(結合母音)の«이»は, «복순 이 다»〔福順ちゃんだ〕(名詞造成あるいは人名の後に付けられる接尾辞)の«이», «복순 이 말하기를»〔福順が言うに〕(主格の吐)の«이», «복순 이 말하기를»〔福順, この話すことを〕(指示代名詞)の«이」と歴史的に連携があるものと見なければならぬであろう(中国語における指示代名詞に起源のある「是」の歴史的変遷に対する

る興味深い叙述を, アー・アー・ドゥラグノフ, 現代中国語文法研究^①, 第1部, モスクワ-レニングラード, 1952年, 36-38頁で見ることができる)。

このように, 語幹が子音で終わる名詞と関連の深い「이」は, そうした名詞が述語になって表れるときにも常について回ることになり, そうであるがゆえに, そうした位置で今日も格別な意味もなく結合母音となってしまったのである。

しかし, 述語となったあらゆる名詞がこの「이」を要求するのではない。述語となった名詞は,

1. いかなる吐もなしに表れる(«나는 조선의 인민 군대»[私は朝鮮の人民軍隊])。
2. «이」なしに直接吐とともに表れるか(«나는 조선의 인민 군대다»[私は朝鮮の人民軍隊だ]), あるいは
3. «이」が挿入された吐とともに表れる(«나는 조선의 대학생이다»[私は朝鮮の大学生だ])。
4. 結局, «이다», «이고», «이며」は«다», «고», «며」の変種に過ぎないのであり, このとき繫辞の役割を果たしているのは, まさに«다», «고», «며」である。

したがって, 述語となった名詞を名詞+指定詞あるいは動詞のような特別な品詞と見ることができる。

結論的にいえば, 朝鮮語の吐は名詞, 形容詞, 動詞に共通して用いられるのであり, したがってここで文法的抽象の原則にしたがって, 共通した要素「吐」を別に分けて, これを1つの独特な品詞とみることができるのである。

[以上が(上), 以下より(下)]

VII

次に, われわれは独特の品詞としての吐がどのような特性をもっているのかという問題を考察する必要がある。結論的にいえば, 吐は単語と形態部^②(接辞)との2つの特性を兼ねた二重的, 両面的な存在である。単語の特性をもつと同時に形態部的特性をもち, 形態部的特性をもつと同時に単語的的特性をもっている。こうした特性は, たとえばロシア語でヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフが連結的単語, 補助的単語, あるいは小品詞とよぶ単語が, まさにこうした両面的な性格をもっているのと似ている。

ここで, ロシア語におけるそうした単語の特性をみれば次のとおりである。

^① A. A. Драгунов, *Исследования по грамматике современного китайского языка*, Изд-во Академия наук СССР 1952.

^② 金壽卿は「形態部」を morpheme の訳語として用いているため, この翻訳では原則として「形態素」と訳している。ただ, ここでの「形態部」はヴァンドリエスの意義部(語彙的形態素) / 形態部(文法的形態素)の区別を念頭に置いていると思われるため, 「形態部」としておいた。

品詞に対して小品詞, 連結的, 補助的単語が対立する。単語のこの構造-意味論的類型には命名的機能はなく, そこには「対象的連繋性」がない。こうした諸単語はただ命名語を通じてのみ現実世界と関係を結ぶことになる。これらは原因, 時間, 空間, 目的等の存在の関係の最も一般的で抽象的な範疇を反映する, そうした言語的意味論に属する。これらは, 言語の記述を複雑化させ発達させながら, それと最も緊密につながっている。連結的単語は, 「物質的」でなく, 形式的である。そこでは「実質的」内容と文法的機能が一致する。それらの語彙的意味は文法的意味と同一である。この単語は, 辞典と文法との境界線上にあるとともに, 単語と形態素との境界線上にある。(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ, ロシア語〔前掲〕, 30頁, 傍点は引用者) 連結的単語は, 語彙的意味に対する文法的意味の明白な優勢によって特徴づけられる。この点においてこれらは形態素と同一である。これらによって表現される諸概念のあいだの文法的関係の多様性は(例:前置詞 *v*, 接続詞 *cto* の意味), それらの意味論的容積を大きく拡大し, その結果, 多義性の点においてそれらは他のあらゆる種類の単語を凌駕している。だが, それらの意味は独特である。そこで文法的意味は語彙的意味と同一である。小品詞の内的分化は単一文あるいは複雑な統辞論的全一体の構成のなかでそれらが果たす統辞論的機能の差異によって規定される。(同上書, 34頁, 傍点は引用者)

感動詞以外に品詞のグループから補助的単語が容易に分離して出てくる。「われわれの文法の多くの品詞は形態素(すなわち純文法的関係の表現者)と何ら違いがない。前置詞と接続詞等の小品詞がまさにそれである。」(ヴェンドリエス, 《言語》^①, ロシア語訳, 1937年, 116頁) (同上書, 40頁)

小品詞とは, 普通, 完全に自立的な実質的意味をもつことはなく, 主に他の単語, 単語群, 文章等の意味に補充的意味を付与したり, あるいは各種の文法的(したがってまた論理的および表現的)関係を表現したりするのに服務する, そうした単語の部類を言う。こうした単語の語彙的意味は, それらの文法的, 論理的あるいは表現-文体的機能と一致する。そのため, これらの小品詞の意味論的容積はたいへん広範であり, それらの語彙-文法論的意味はきわめて動揺しており, 統辞論的使用に左右されている。「これは, 言ってみれば, 語幹から抜け出して, 言語の表面の上を自由に移動する接辞であると見ることができる。」(アー・エム・ベシコフスキー, ロシア語統辞論^②, 第6版, 67頁) (同上書, 663頁)

前置詞は, 間接目的語の膠着的接頭辞として固着しうる。[...]しかし前置詞の語彙的意味と

^① 原著は, J. Vendryes, *Le langage: introduction linguistique à l'histoire*, Renaissance du livre, 1921. 同書については, 金壽卿は解放前に接しており, 1949年の『龍飛御天歌』に関する論文(本シリーズNo.1参照)でもフランス語版を参考文献に入れている。朝鮮戦争の被害でフランス語版が手に入らなかったためか, ここではロシア語訳を参照している。

^② А.М. Пешковский, *Русский синтаксис в научном освещении*.

文法的機能の差異はきわめて大きい。前置詞は、一方の極では副詞の分野に所属しながら、他方では名詞の「前置的屈折語尾」(ヴェ・アー・ボゴロジツキー [В. А. Богородицкий] の表現)あるいは動詞の「後置詞」に接近する。それらは自らの実質的、語彙的意味を喪失しながら、純粹な格的接頭辞あるいは動詞的「後付け」—動詞の間接—転移的關係の表現者となる(例: *dumat' o budushchem; toskovat' po ottse; somnevat' s'ia v chem nibud'* など)。 (同上書, 677, 678 頁)

以上のように、連結的単語、補助的単語、あるいは小品詞が単語と呼ばれながらも、同時に接辞としても見ることができる性格をもっていることがわかる。すなわちロシア語において前置詞 *v, s, k*, 接続詞 *i, chto* あるいは助詞等が、単語と形態部(接辞)との2種の特性を兼ねた二重的、両面的存在であることは明らかである。

これと同様に、朝鮮語の吐も、一方では接辞の性格をもっているとともに、他方では単語と呼ばれる特性をもっている。

単語とは何かという問題は、もちろん言語学において最も難しい問題のうちの1つである。以前エル・ヴェ・シチェルバが「結局“単語”とは何か? 言語によって、これはそれぞれ異なると私は考える」(エル・ヴェ・シチェルバ, 言語学の当面問題, 科学アカデミア通報, 文学言語学学科, 1945年, 第2分冊, 175頁)と述べていたように、単語を規定する基準はそれぞれの言語の特性にしたがって相互に異なりうるものであり、また当然異なるべきものである。

しかしここで、単語を規定する基準に関するアー・イ・スミルニツキー [А.И. Смирницкий] の論述は、われわれにも一定の助けとなりうる。彼は次のように述べる。

だが、個別的な形態素や単語の他の部分と区別されるような、言語の単位としての単語について現実的に述べる根拠をわれわれがもっているあらゆる所では、この単位が一定の形態具備性 (*ofornlennost'*) に該当する内的完結性 (*zakonchennost'*) によって規定される区画可能性 (*vydelimost'*) をもっている点において、いかようにでも特徴づけられる。 (アー・イ・スミルニツキー, 単語に関する問題について, 《言語学に関するイ・ヴェ・スターリンの労作に照らしてみた言語の理論と歴史の諸問題》^①1952年, 197頁)

こうして、個別的な完全な単位としての単語は、本質的により多くの区画可能性によって、単語の構成部分と区別されるのであり、この区画可能性は、単語の一定の形態具備性と、またこれに関連する単語の相対的完結性によってなしとげられる。単語の諸部分は、こうした形態具備性と完結性をもっていない。 (同上書, 195頁)

^① *Вопросы теории и истории языка в свете трудов И.В. Сталина по языкознанию*, Изд-во Академии Наук СССР, 1952.

したがって、われわれが単語であると規定しうるためには、そこに区画可能性がなければならないのだが、この区画可能性は一定の形態具備性と相対的な内的完結性によってなし遂げられる。われわれは、既に第Ⅱ節において、膠着語の接辞が屈折語に比べて相対的に見て意味的完結性と区画可能性をより多くもっているとの結論を得た。故に、われわれは朝鮮語の吐が一定の区画可能性をもっているとして主張することができ、その根拠として吐が一定の相対的な内的完結性を有しているという点を挙げることができる。ここでただ1つ問題となるのは、吐を補助的なものであるとはいうものの、1つの単語とみたとき、吐と結合して表れるいわゆる語幹部分が形態具備性をもっているのか、いないのか、仮にもっていたとしてどのようにもっているといえるのかという問題である。この問題については、このあとの第Ⅷ節で詳細に議論することになるので、ここではこれ以上立ち入らずにおきたい。

朝鮮語の吐の区画可能性は、特に次のような具体的事例によって証明することができる。

«나는 어제 시, 소설, 희곡을 읽었다»[私は昨日詩, 小説, 戯曲を読んだ]という文章において、格吐«을»[-を]はただ«희곡»[戯曲]にのみ関係するのではなく、「시»[詩], «소설»[小説]にも関係しており、いってみれば、«나는 어제 시를, 소설을, 희곡을 읽었다»[私は昨日詩を, 小説を, 戯曲を読んだ]と言わなければならないところを、すなわち $Ax+Bx+Cx$ を $(A+B+C)x$ のような代数的抽象の形式によって表現している。したがって、ここで格吐«을»を«희곡»にのみ専属させるのではなく、これを別を選び分けて、その形態と機能を考察しないわけにはいかない。これと同様に、「뛰고, 덩굴고, 놀더라도»[走って, 回って, 遊んでも], «배우고, 배우고, 또 배우자»[学んで, 学んで, もっと学ぼう]のような表現においても«뛰더라도, 덩굴더라도, 놀더라도»[走っても, 回っても, 遊んでも], «배우자, 배우자, 또 배우자»[学ぼう, 学ぼう, もっと学ぼう]と言わねばならぬところを、すなわち $Dy+Fy+Gy$, $Hx+Hx+Hx$ を, $(D+F+G)y$, $(H+H+H)x$ のような形式で表現しているのである。

また、吐«를»は、それが格吐であるだけに、名詞あるいは名詞的形態に関係しなければならないにもかかわらず、

먹어를 못 보았다 [食べてみたことがない]

만나를 못 보았다 [会ってみたことがない]

어서 넘어를 가자 [さあ越えて行こう]

のように、動詞の一定の形態と合わさって表れる場合があり、「누가 이기느냐가 문제다»[誰が勝つかが問題だ]のような表現もある。こうした例を見ても、格吐«를»あるいは«가»を名詞から分離しえないものと見るのは極めて困難である場合が存在している。そのみならず、アー・アー・ホロドーヴィチが朝鮮語の格吐について、これを第1系列(*pervaia seriiā*)と第2系列(*vtoraia seriiā*)の2種類に分けて説明していることは注目に値する。

第1系列とともに第2系列があり,これは位置的意味をもつ(場所,方向等を指示する)第1系列の格吐いくつかを相互に連結させるか,あるいは形態素«서»と連結させて成立する。こうした吐には与格,対格および具格が入っている。

1. 与-処格

- a)非活動体 에서
- b)活動体 에게서

2. 与-対格

- a)非活動体 예를
- b)活動体 에게를

3. 与-具格

- a)非活動体 에로
- b)活動体 에게로

4. 具-処格 로서

これらすべて格のなかで名詞の前にくることができるのはただ属格だけである。しかし若干の他の格が,属格の吐と結合すれば,名詞の前にくる機能を遂行する能力を得ることになる。

1. 与-属格

- a)非活動体 에의
- b)活動体 에게의

2. 具-属格 로의

3. 共-属格 와의

4. 与-処-属格

- a)非活動体 에서의
- b)活動体 에게서의

5. 与-具-属格

- a)非活動体 에로의
- b)活動体 에게로의

(アー・アー・ホロドーヴィチ, 朝鮮語文法概要, 55頁)

ここで見られるように,格吐が2つまたは3つずつ相対的に自立性をもって並んで表れているのみならず,«있어서의»,«비하어서의»,«관하어서의»などのような独特の表現も存在する。このような現象は屈折語の語尾等では見られない現象であって,朝鮮語の吐の区画可能性をものがたる

端的な証拠といわざるをえない。

朝鮮語の吐がもつ単語的な性格を有力に語る伝統的な事実としては、朝鮮語辞典編纂の実践的事業において、今日まで出されたあらゆる辞典で「吐」を他の語彙と同じ資格で掲載してきたという点がある。他の諸言語の場合、特に屈折語においてはたとえば語尾の部分を別途辞典に載せることがないことに照らせば、朝鮮語辞典編纂におけるこうした実践は、朝鮮語の吐の特異な性格を論証するものであり、またこうした方式は今後も引き続き実践されることが適当であろう(アー・アー・ホロドヴィチの《朝鮮語文法概要》の巻末には「形態素と補助的単語の索引」として、吐も含む文法的語尾の表現者を一覧表にして列挙していることは興味深い事実である[同上書, 312-314頁])。

次に記憶すべき重要な事実は、一般的に言語行為において補助的な単語の使用の頻度が極めて多いという事実である。朝鮮語の吐の使用頻度が極めて多いであろうことは十分に想像されるが、その統計を現在もっていないので、これを具体的な数字によって提示することは難しい。参考としてフランス語、ドイツ語、ロシア語の統計を挙げてみれば次のとおりである。

補助的単語はとてその数が多く生産的である。速記家たちの統計的計算によれば、最も多く使用される単語のうち、最も大きな地位を占めるのは前置詞、接続詞、助詞および代名詞である。たとえば、フランスの速記家であるエストゥ(J. B. Estoup)が計算したところによれば、2万単語のフランス語文書のうち12個の単語(冠詞と前置詞)が8,000回反復しており(これは文書全体で40%を占める)、3万単語の文書において1,001番目の単語から2,000番目の単語までのあいだに新語出現が23%、9,001番目の単語から10,000番目の単語までのあいだの新語出現が9%、29,001番目の単語から30,000番目の単語までのあいだでは新語出現が4%だという。(J.B.エストゥ, 速記習得の方法と練習^①)

ドイツ語における各種の単語や単語の範疇が使用される統計的頻度を計算したケーディング(F. W. Kaeding)は、彼が調査した1,100万単語からなる文書に冠詞 *der, die, das*, 接続詞 *und*, 前置詞 *zu* と *in* が1,292,149回反復され、その結果、ドイツ語文書の全体構成において12%を占めるということを発見した。(ケディング, ドイツ語頻度辞典^②, 1911年)

ロシア語に関していえば、予備的な統計的計算によると、54,000単語(54,338単語)の文書で(書写語と会話語の各方面にわたって抜粋した諸断片)、最も頻繁に現れるのが *v*(1,881回), *na*(770回), *s*(578回), *k*(267回), *za*(259回), *dlia*(230回), *iz*(202回), *ot*(174回), *do*(108回), *pri*(80回)となっている。エン・アー・モロゾフ(H. A. Морозов)もまた「言語学的スペクトル」という論文で、ロシア語の前置詞で最も多く使用されるのは *v, na, s* だとの結論に到達した(科学アカデミア語文

^① Jean-Baptiste Estoup, *Gammes sténographiques: Methode pour l'acquisition de la vitesse*, Duguet, 1915.

^② F.W. Kaeding, *Häufigkeitswörterbuch der deutschen Sprache*, E.S. Mittler & Sohn, 1897.

学部通報, 1945年, 第20巻, 第4冊, 110-112頁)。接続詞のなかで使用頻度の点において i(54,000 単語の文書中 1,963 回)と a(740 回)が突出している。接続詞と前置詞は特に叙事語のなかで巨大な組織的役割を果たしている。(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ, ロシア語, 663-664 頁)

このように、一般的に補助的単語の使用頻度が高いのならば、区画可能性の高い朝鮮語の吐を、毎度のようにいわゆる語幹と分離しないままで考察したとするのは、すなわち語幹と吐が相互に合わさって表れる情景に代数的抽象を加えずに算術的に考察するのは、どれほど多くの説明上の浪費となるのか。(A+B+C)x と見れば極めて簡単なものを、常に Ax, Bx, Cx としてのみ考察することは、科学研究、特に文法研究において無意味な浪費となりうるであろう。

以上、吐の区画可能性を論証しながら、従来、朝鮮語の吐の単語的性格の側面についての論証が弱かったところ、その側面を強調し、つまるところ吐が接辞と単語との二重的、両面的性格をもっているのだということを書いてきた。

では次に、このように特異な性格をもった吐を 1 つの独特な品詞とみれば、どのような利点と利益があるのかということを見てみよう。

第 1 に、吐が朝鮮語の文法構造において最も重要なものであるにもかかわらず、従来はただ吐を別に切り分けて、こうした文法的意味を表すものであると、極めて一般的かつ抽象的に説明してきた。すなわち吐がもつ語彙-文法論的意味を極めてぞんざいに叙述してきたのであるが、吐を 1 つの品詞として設定し、これに対して詳細に考察すれば、吐のさまざまな側面を一層精密に、余すところなく説明することができるであろう。これは朝鮮語文法の内容を豊富にするために特別に重要である。

第 2 に、吐を 1 つの品詞と見ることによって、従来のいわゆる語幹部分の自立性が強くなる。こうした点から見て、「語幹」という用語は朝鮮語においてはむしろ適当でない感があるのであって、今後「^{マルキム}語体(말뭉)」という用語によってこれと呼ぶのがより適当であろう。「語体」と「吐」といえば、相互間の相対的完結性と区画可能性の特質をよりよく表すことができるであろう。

しかし、ここで名詞の語体の自立性が十分なのはもちろんであるが、形容詞、動詞の語体は、それ自体では自立性がなく、つねに吐と結合するほかないと考える人々がいる。すなわち「^집家」, 「^소牛」などの名詞の語体はそのままでも理解され、言語行為においてそのまま使うことができるが、「^늙老い[る]」, 「^보見[る]」などの形容詞、動詞の語体は、そのままでは理解されることはなく、かならず「^{늙다}」, 「^{보다}」などのように、吐と結合してはじめてその意味が理解されうるのであり、また言語行為においても用いることができると言われる。

しかし、「^집」・「^소」と「^늙」・「^보」を、そのような観点から相互に区別して見ることはできない。「^집」や「^소」という語体において、われわれが「家」「牛」という意味を理解するとすれば、「^늙」・「^보」とい

う語体からも「老」・「見」の意味を理解しうる。「늙다」・「보고」にならないと「老」・「見」の意味を理解しえないのではなく、「늙」・「보」などの語体それ自体として「老」・「見」などの意味を理解しうるのである。そのことは、たとえば「늙바탕」[老境]、「보살피다」[面倒を見る]のような合成語において、「老」・「見」の意味を、まさに「늙」・「보」によって理解することができ、その語体のみによってその意味を理解するのに必要で十分な条件が具備されているという事実によって分かる。

実際の言語行為において、名詞の語体はそのまま使われるが、形容詞や動詞の語体はそのまま使われることがないということは、その観察が皮相的であるといわざるをえない。実際の言語行為においては「늙다」, 「보고」などで用いられるのと同様に, 「집이」, 「집을」, 「집이다」, 「집이고」, 「소가」, 「소를」, 「소다」, 「소고」が使われるのであり, ただ名詞の場合には語体のみよって, すなわち絶対格の形態として現れることが多いのに対して, 形容詞や動詞の場合には語体だけの形態で現れることがほとんどない点が異なっているだけである。しかしこれは形容詞, 動詞の語体に何らかの欠陥があつて, すなわちそれに一定の自立性がないからそうなのではなく, 名詞として表現されるのは主に対象, 事物(あるいは一般的に対象化するもの)であり, 形容詞や動詞として表現されるのは主に性質, 属性であること, そして対象や事物それ自体は現実世界において自立性がある一方で, 性質や属性は現実世界において自立性がないことから, 形容詞や動詞がいつも一定の対象をどのような方式であれ規定するものを表すことになるがゆえに, 名詞に比べて単独的に用いられる場合が少ないだけである。

対象・事物と性質・属性との関係およびそれらの特質については, 次のような論理学者ペー・ヴェ・タヴァニェツ(П.В. Таванец)の叙述を引用しうる。

事物は, 現実において標識なしに, すなわち性質, 特性, 状態, 関係等なしには存在しえない。マルクスが主張するように, 「事物はさまざまな属性の総体である。」(K. マルクス《資本論》第1巻, 1951年, 41頁) これとまったく同様に, 現実においては事物と遊離した標識も存在しない。F. エンゲルスによれば, 「存在するものは性質ではなくただ事物のみであり, それも性質, 無限に多い性質を所有した事物だけである。」(F. エンゲルス, 自然弁証法, 1952年, 184頁) [...]標識という用語のもとに, 論理学では単に対象の特性(赤い, 良い, 酸っぱい等)だけではなく, また単に対象の状態, 活動(立つ, 寝る, 泳ぐ, 読む等)だけでもなく, 一般的にあれこれ判断の対象を性格づけるあらゆるものを理解する。(ペ・ヴェ・タヴァニェツ, 判断とその種類^①, 1953年, 32頁) 対象の属性は自立的な存在をもっていない。したがって判断において肯定されたり否定されたりする標識の属性は, これを個別的対象の資格によって考察することはできない。(同上

^① П. В. Таванец, *Суждение и его виды*, Изд-во Академии наук СССР, 1953.

書, 87頁)

すなわち, 自立性がないのは現実世界の対象の属性なのであって, その属性を表す形容詞, 動詞の語体ではないのである。属性が常にある対象を規定しているために, 自然に属性を表す形容詞・動詞がある対象を表す単語を規定する形態として——多くの場合に吐をつけて, 時には吐なしにも——広く使用されているにすぎない。

こうした形容詞, 動詞の語体の自立性は, «가!», «보!», «주!», «이리오!»等にも表れているが, それよりも重要なのは合成語に表れる形態であって, まさに語体の自立性を認めることによって実践的な面で大きな成果を得ることができるのは, この単語造成の分野である。朝鮮語の単語造成には語体と語体とのあいだに吐を挿入せず, これらを直接結合させることで新たな言葉を作るという手法が重要な役割を果たしている。ここにそうした単語造成の実例を挙げるならば,

動詞+動詞

감돌다, 걸물다, 걸잡다, 걸앉다, 깨물다, 꿰들다, 꿰뚫다, 꿰매다, 내놓다, 내밀다, 내주다, 넘나들다, 노닐다, 드나들다, 듣보다, 들엿드리다, 들오다, 따돌리다, 뛰놀다, 지새다, 오가다, 여달다, 붙잡다, 돌보다, 넘보다, 오르내리다, 밀막다, 베물다, 보살피다, 붙들다, 빼물다, 섞바꾸다, 엮매다, 엮누르다, 엮지르다, 옴매다, 우닐다, 잇달다, 잇대다.

形容詞+形容詞

검누렇다, 검붉다, 검푸르다, 굳세다, 높낮다, 세차다, 옳바르다, 재빠르다, 약빠르다.

形容詞+名詞

검버섯, 곱돌, 곱창, 가깝증, 싫증, 납작코, 늪바탕, 두텁떡, 넘적다리, 심심풀이, 높낮이.

動詞+名詞

비비송곳, 밟다듬이, 묵밭, 번'이, 접자, 접칼

形容詞+動詞

낮보다, 낮잡다, 무르눅다, 얇보다, 얇잡다.

以上の例は形容詞, 動詞の語体が一定の自立性をもって新たな単語造成に参加している場合であって, こうした手法は必要で十分な要素だけを簡潔に結合させる方法によって, 新たな諸単語を造成するという利点を有している。

今日特に増大している朝鮮語における新たな単語造成に対する要求を解決するために, この手

法を今後も積極的に活用する必要性を強調すべきであり,そこで吐と語体がそれぞれもつ相対的な自立性の認定は,結局朝鮮語の単語造成の問題に大きく寄与することになるといえる。

第3に,朝鮮語の文章を分ち書きする問題に関連して提起される問題がある。現在われわれが使っているような字母-音節式の綴字,すなわち方形綴字の方式は,今後必ずや純字母式綴字の方式,すなわちばらし横書きの方式へと移行しなければならないのであるが,その時に現在の方形綴字の方式で実施されているような分ち書きの方法をそのまま実施するのは困難である。なぜなら,今日のように吐を語体と分けずに書く方式では,ばらし横書きをする際に1単語がたいへん長くなってしまふ。極めて概略的な統計調査によっても,フランス語,英語は1単語の平均字数が5~6字であり,ロシア語,ドイツ語は平均字数が6~7字であるが,朝鮮語の場合には7~8字にもおよびうる。1単語の字数が多いというのは,実践的に文章の判読理解に不便であるのが事実である。意味と形態の点において区画可能性がある一定の箇所では切るのが,文章を読んで理解するには便利なのはとりたてて説明する必要もない。したがってもしわれわれが文章で一定の吐を分ち書きすれば(もちろんどの吐は付けて,どの吐は分ち書くのかという問題は,今後慎重に決定しなければならない問題である),朝鮮語の単語の長さは当然ある程度短くなるのであり,筆者がおこなった簡単な実験の結果によれば,1単語の平均字数は5~6字となる。

以上の事実は,結局,吐を分ち書きできるということを前提とするものであり,吐を分ち書きできるということはまた吐を1つの品詞とみることができるとを前提としている。

以上をもって,われわれは吐を1つの独特な品詞とみれば,理論的,実践的に少なからぬ利点と利益を得られることが分かった。

次に,ここで明らかにしておかなければならない1つの事実がある。吐には文章で単語の役割を表す吐もあり,またそれ以外に単語と文章の意味を助ける吐もある。前者は屈折語の語尾に相当する接辞と見ることができるため品詞ではない吐として認定し,後者は前者と区別される性質をもっている1つの品詞——助詞としてみななければならないという見解(筆者自身もそのような見解をもっていた^①)があるが,そのようにこの2つのものをきれいに分けて1つは接辞,もう1つは品詞と見るのは妥当ではないといわざるをえない。

この問題については,ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフの次のことばを引用するのが参考となるであろう。

ヴェ・エン・シドロフ〔В. Н. Сидоров〕は《ロシア語標準語文法》^②(1945年)で,助詞と補助的単語(前置詞,接続詞,繫辞)とを対立させようという試みをした。「非自立的な単語はそれらがどのよう

^① 金壽卿がその草稿をまとめた朝鮮語文研究会『조선어 문법』(1949年)で,屈折語尾に相当する「吐」を各品詞のなかで論じ(したがって品詞ではない),そこに入らないもの(도, 조차, 만, 든지, 커녕, 보다, など)には,別途「助詞」という品詞を設定していたことを指す。

^② Р. И. Аванесов и В. Н. Сидоров, *Очерк грамматики русского литературного языка*, 1945.

な種類の形式的意味——統辞論的意味あるいは非統辞論的意味——を表現するかによって、2つの部類——補助的単語と助詞とに区分される」(233頁)、「補助的単語とは異なり、助詞は自立的単語の実質的意味に各種の補足的意味ニュアンスを添加することによって非統辞論的な形式的意味を表現する(on to pridet, tol'ko on i pridet, on zhe pridet i等)。したがって助詞は文法的役割と意味の点から見たとき、自立的単語の実質的意味にそれをやはり補足的意味を添加する単語造成的な接頭辞や接尾辞と似たものになる。」(224頁)しかしここで統辞論的意味と非統辞論的意味とを分けるのは、原則における深奥性と明確性がない。それは、内部において相互に矛盾する。この内的矛盾性と概念の没鮮明性は——ヴェ・エン・シドロフの文法で「統辞論的意味」は——助詞を規定し、それを分類するときいつも現れる。助詞とは「喋る人が文章で陳述された内容についてもつ関係において、一般に各種のニュアンスを表現する非自立的単語」をいうことになっている(231頁)。

さらに、疑問の助詞(razve, neuzheli, li), 感嘆の助詞(kak, chto za), 強調の助詞(to, dazhe, vot, ved', zhe), 分離の助詞(tol'ko, pish', pish' tol'ko)および否定助詞を分けている。

こうして、そこでは文章構造における様態的關係を表現するあらゆる手法が統辞論の外へと追いやられている。こうした観点をもつ皮相的な形式主義と非慎重性は、助詞の機能を説明する次のような説明的な例からも極めて明確に現れる。「*«Ne drug, a vrag», «Razve vy èto znaete?»*», «*Ne daleko, no i ne blizko*», «*Chto za strannyĭ spuchaĭ!*»等において、すべて助詞の機能が統辞論的性格をもっている理由は、疑う余地がない。助詞と単語造成的接辞とのあいだには類似性も類推性も平行性もない。助詞はこれら(この用語がいかに曖昧なものであったとしても)独特な単語の類型と見なければならぬが、前置詞、接続詞および繫辞が属しているまさにその文法-意味論的部類のなかにおいて、そのように見なければならぬ。(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ, ロシア語, 664-665頁)

朝鮮語においても単語あるいは文章の意味を助ける吐が統辞論的機能をもっていないと言うことはできない。「*만*», «*도*», «*마저*», «*조차*»等の吐が文章のなかで一定の文章成分とのみ結合して現れうるという事実は看過することがとうていできない。

それゆえ、もちろんこうした吐を独特な単語の部類と見なければならぬものの、他の種類の吐とともに属することになる大きな部類のなかで、一定の場所を占めるものと見なければならぬだろう。

VIII

ここまで、われわれは吐を1つの独特な品詞と見た。であればこそ語体それ自体が名詞、形容詞、動詞とよばれるようになるのだが、それではこの名詞、形容詞、動詞には文法的範疇が設定される

のか、されないのか？これらの品詞における文法的範疇の問題はどのようなものであり、その表現形態はどのようになるのか？

まず文法的範疇と文法的形態という用語の意味については、次のような定義を引用することができる。

文法的範疇と文法的形態に関する理論は、文法における中心的位置を占める。文法的範疇という用語のもとに普通、単語に固有でありながらこれら単語の具体的意味から抽象化された、別言すれば各種の关系的意味を表す一般化された性格を帯びた意味として、個別的な諸単語の変化と文章における単語の結合のような言語的手段として表現されたものを想定する。一定の外的な単語的手段による文法的範疇の表現を、文法的形態と呼ぶ。(ソビエト大百科事典, 第12巻, 424頁)

文法的範疇と文法的形態の問題は、基本的に形態論の分野に属するものであり、また形態論は単語の変化に関する規則の集成である。したがって単語の変化という表現をどのように理解しなければならないかという問題が提起されるとともに、単語の変化の概念、単語の形態の概念を明確にする問題が極めて重要なものとして提起される。なぜならば、単語の形態、単語の変化の概念を極めて素朴に、ただ単語の語尾変化とのみ理解する傾向があるためである。

かつて、エル・ヴェ・シチュエルバは論文「ロシア語の品詞について」で次のように述べた。

範疇の外的表示者は多種多様なものでありうる。各種類型の単語の「変化性」、接頭辞、接尾辞、語尾、句アクセント、語調、語順、独特の補助語、統辞論的連繋など、範疇の標識、表示者は積極的な場合もあるし消極的な場合もある。こうして「変化性」に対立する、単語の「不変性」もまた、たとえば、副詞の範疇の表示者でありうる。(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ, ロシア語, 32頁)

また、次のヴァンドリエスの見解に関する叙述も参考になる。

こうしてヴァンドリエス教授は、文法的範疇が表現される形態を表示するために **morfema** という用語を使用しながら、文法的関係を表現するあらゆる言語的な諸要素を決定的に **morfema** に所属させている(接辞、単語または文章におけるそれらの順序、母音交替、内部屈折、アクセント、語調、ゼロ形態素、補助語、語順)。(ヴァンドリエス, 言語, ロシア語訳, 76~92頁。ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ, ロシア語, 32頁)

単語の変化, 単語の形態の概念をこのように広く理解するならば, 朝鮮語の名詞, 形容詞, 動詞における文法的範疇とその表現を語体と吐との結合において見いだすことができると言える。これはそれぞれ 2 つの単語とみてもそこに一定の文法的形態が表れていると言えるだろう。これに関しては, 単語の形態表現に総合的形態と分析的形態があるということを理解する必要がある。特に分析的形態に関していえば, 次のとおりである。

各種の文章諸成分の結合, 1 つの文章成分を成す諸単語の結合, そして単に 1 つの文章成分を成すだけでなく形態論的關係において単一の形態を成す諸単語の結合, これらのあいだに厳格な区画を引くことが必要である。この後者は, そのうちの 1 つの単語が他の単語と常に結合しながら補助的な性格を帯び, それが結合した単語の一定の文法的範疇を表現するためにのみ使用される, そうした場合に観察される。たとえば, ロシア語で未定形と結合した動詞«budu»は自立的な意味をもたず, ただ不完了態の未来時称の範疇を表現するためにのみ使用する(例: «budu pisat»)。このような単一でありながら, 何個かの単語から構成される諸形態は分析的形態と呼ぶことになっている。動詞の分析的形態は数多くの西ヨーロッパ諸言語に, たとえば, 英語, フランス語に広範に普及している。(ソビエト大百科事典, 12 巻, 426 頁)

ロシア語において, 単語の文法的形態が表現される基本的手法として, ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフは次のような 7 種を挙げているが, そのうち最初的手法がまさにこの分析的形態である。

1) 単語あるいは単語の形態の合成によって

例: budu chitat' — 動詞 chitat' の未来形の合成的, 分析的形態。

samyi krasivyi — 形容詞 krasivyi の最上級の合成的, 分析的形態。

2) 語尾と接尾辞によって

例: stena—stenka; vyigrat'—vyigravat'; ruka—ruke 等々。

3) 接頭辞によって

例: delat'—sdelat'; blednet'—poblednet'; skvernyi—preskvernyi 等々。

4) 接尾辞と接頭辞の結合した作用によって

例: predobreishei dushi chelovek で, predobreishei は, 単語 dobryi の形態の体系に属する。

5) 語音後退によって, しばしば接尾辞の法(アクセントの手法を含む)と連結して

例: god—góda—godá; sela—sěla; zapodozrit'—zapodozrivat'。

6) アクセントの変化によって

例: izbý—ízby; rukí—rúki。

7) かつてはまったく異なる諸単語だったものが1つの単語の形態になりうる

例: *chelovek—liudi; brat—vziat'; ukladyvat'—ulozhit'; sadit'sia—sest'*.

(ヴェ・ヴェ・ヴィノグラードフ《ロシア語》35～36頁)

こうした分析的形態(合成的形態)については、ソ連の科学院編纂《ロシア語文法》においても次のように叙述されている。

合成的形態は、2つまたはいくつかの単語の形態の単純な結合によって構成される。例: *буду chitat'*——動詞 *chitat'*からの未来形の形態; *о slaze*——名詞 *slaza*からの前置格の形態; *samyi schastlivyi*——形容詞 *schastlivyi*からの最上級の形態; 単語 *буду, samyi* はこれらの場合に形態素の役割を果たす。(ソ連科学院編纂《ロシア語文法》第1巻, 1952年, 16頁)

ここにロシア語で単語の形態表現の分析的、合成的手法において形態素の役割を果たす単語を果たす単語の例を挙げれば、次のとおりである。

- 1) 助詞 *by*: 動詞の過去形とともに使用され仮定法を作る。
- 2) 助詞 *byt'*: 不完了態動詞の未定形とともに使用されて未来形の複合形を成し、形動詞過去形とともに使用されて被動相の複合形を成す。
- 3) 助詞 *pyst' puskai*: 3人称動詞の命令形を成す。
- 4) 助詞 *da*: 荘厳な文体で動詞の命令形を成す。
- 5) 副詞 *boleye, meneye*: 形容詞の比較級を成す。
- 6) 代名詞 *samyi*: 形容詞の最上級を成す。

次にわれわれは英語における分析的形態を見てみよう。

語尾の喪失と並行して、英語における他の過程——分析的形態の形成過程を観察することになる。

分析的形態は、外的には2つの単語(あるいはそれ以上の)をもって成立しているが、意味は2つの要素を1つの意味的全体として、1つの単語として合同する。分析的形態に入る要素のうちただ1つだけが語根的、語彙的意味をもち、第2の要素は語彙的意味をもたず、ただより抽象的な文法的意味だけを有している。

たとえば、現在完了時称の分析的形態を挙げてみよう。He has come. ここでただ come だけ

が語彙的な意味をもち、has はここで「持つ」という意味を表さず、ただ文法的な要素のみになっており、その機能は時称、人称、数等を表す。これは助動詞である。

英語の未来形もまた分析的形態である。I shall come. ここで語彙的な意味は come で表現されており、助動詞 shall は義務の意味を喪失し、ただ時称(未来)と人称(第1人称)を表現することにのみ服務する。ロシア語で不完了態の未来形が、また分析的な形態であることと比較せよ。ĪA budu prikhodit'.

英語の動詞には、特に分析的形態が豊富である：

未来形 (shall, will+未定形),

完了形 (to have+過去分詞),

持続態 (to be+現在分詞),

一般態の現在と過去の否定形と疑問形 (to do+未定形) 等々 (He will come. He has come. He is coming. He does not come. Does he come? 等々)。

分析的形態は形容詞の体系においても見られる。

普通は1音節においてのみ語尾 -er, -est の助けによって総合的に形成される比較の級(比較級と最上级)は、多音節語においては補助的な単語 more, most と形容詞の基本形との結合によって表現される (beautiful – more beautiful – most beautiful)。

比較の級が同様に分析的形態によって表現されうるロシア語の場合も比較せよ。silonyĩ – boleye silonyĩ - samyĩ silonyĩ (silonyeitseĩ)

こうして、現代英語の形態論は総合的形態と分析的形態を含んでいる。(エム・ガンシナ, エン・ワシレフスカヤ《英語文法》^①1954年, 第7版, 9頁)

さらに、われわれにとって極めて興味を引く事実として必ずや言及しておかなければならないことは、最近、中国の言語学界で進行している「中国語に品詞はあるのか、ないのか」という問題を中心とした議論である。中国語の品詞に関する問題は、かねてより常に議論の対象となってきたが、特に1953年10月に雑誌《中国語文》に高名凱の論文「中国語における品詞分類について」が発表され、そこで著者が中国語の単語は品詞として分類しえないと主張して以降、特に鋭くも活発に意見の闘争が展開されはじめた。

1955年7月号の《中国語文》に載った同雑誌編集部の議論の中間総括によれば(「中国語に品詞があるかないかの議論について」《中国語文》1953年7月号, 20頁以降。またヴェ・エム・ソーンツェフ [B. M. Солнцев]「中国言語学者らの労作に見る中国語の品詞の問題」, 雑誌《言語学の諸問題》1955年6号, 105頁以

^① M. A. Ганшина, Н. М. Василевская, Практическая грамматика английского языка,

降参照), 中国語に品詞がないと主張する側には高名凱と柳正炎の2人が4篇の論文を発表し, これと反対に中国語に品詞があると主張する側には曹伯韓, 文鍊, 胡附, 呂叔湘, ベー・ゲー・ムドゥロフ〔Б. Г. Мудров〕等, 21名が19篇の論文を発表し, 中国言語学者の絶対多数は中国語に品詞があると主張しており, またソ連の中国語学者らもこの見解を支持している。

この双方の見解を詳細にここで叙述する必要はない。ただここでは中国語に形態と形態論が存在し, したがって中国語に品詞があると主張する側の学者らの見解のうち代表的な文鍊と胡附の2人の論文「品詞について」(《中国語文》1954年2月号・3月号, この要旨がまた《言語学の諸問題》1955年3号, 55頁以降にロシア語で翻訳されている)から, 必要なところだけを引用するにとどめ, これをもってわれわれの問題の解明に助けを得ようと思う。文鍊と胡附は次のように言う。

形態とは何か。「形態」の概念は広い意味と狭い意味の2つの意味をもっている。狭い意味における形態とは, 個別的な単語の接頭辞と接尾辞を意味しており, たとえば, 英語の複数名詞にはsが添加され(a boy, two boys), 動詞は時称に従って(work, worked), 形容詞は比較の級に従って(high, higher, highest), それぞれ変化し, 代名詞は「性」の区分と(he, she, it)格の区分(he, his, him)をもっている。また接尾辞-ty, -rg, ce, -ness, -tion, -ment, -or, -erなどをもった単語は名詞であり, 接尾辞-al, -et, -is, -ful, -ish, -ous, -ive, -able, -ibleなどをもった単語は形容詞であり, 接尾辞-enをもった単語は動詞, 接尾辞-lyをもった単語は副詞である。単語の後ろに添加され, 単語の範疇的な性質を表現するこれらの接尾辞が狭い意味における形態である。

広い意味における形態は, 単語自体の形態の変化以外に, 諸単語のあいだの相互関係, 諸単語の結合, 単語結合における諸単語の順序などを包括する。こうした広い意味における形態は, 単語を個別的にみているは見いだせない。

中国語に狭い意味における形態はあるか。われわれはこの問題に対して肯定的に答える。「子」, 「兒」〔儿〕, 「頭」〔头〕が接尾辞であることを承認しない人はまずいないであろう。

また, これらの接尾辞が添加される諸単語が同じ範疇の諸単語であることを否認する人もいないであろう。しかし問題はここにあるのではない。問題は次のような点にある。すなわち単語にこうした接尾辞を添加する結果として, その単語の特性に影響を及ぼしうるのかえないのかという問題である。高名凱は, それはできないと言う。彼によれば, 「中国語にももちろん形態がある。単語“白麵”の後ろに接尾辞“兒”を添加すれば, “白麵兒”という単語ができる。“兒”は形態である。しかしこの接尾辞を添加しても, この単語を他の品詞に所属させることはできない」(《中国語文》1953年10月号, 14頁)という。もちろんこの例を見れば, 「兒」を添加しても単語の特性に影響を及ぼすことはない。しかし,

- 1) 活〔はたらく〕——活兒〔工作〕

- 2) 胖[ゆたか]——胖子[でぶ]
呆[おろかな]——呆子[ばか]
辣[からい]——辣子[からいもの]
- 3) 看[みる]——看頭[みる価値がある]
想[おもう]——想頭[おもい]
苦[くるしい]——苦頭[くるしさ]
吃[たべる]——吃頭[たべもの]

これらの例を見れば、「子」、「児」、「頭」があるかないかによって、単語の特性が変わっている。われわれはここに「文法的範疇の変化を起こす形態(狭い意味において)」(同上書)が存在するというのを認めざるをえない。のみならず、これらの形態が品詞分類の助けを与えうるということを否認することはできない。それとともに、われわれはまたこうした助けが不十分だということ認めなければならぬ。中国語では形態の変化をすることのできる個別的な単語は、結局その数が少なく、これが中国語における品詞分類のための主要な標準となるには不十分であるため、われわれは不可避に広い意味における形態に依拠せざるをえない。

方光燾によれば、「私は、諸単語の相互関係、諸単語の結合がまさに広い意味における形態であると認定する。個別的な中国語の単語の固有の形態は少ないので、品詞を分類するに際しては当然広い意味の形態に依拠せざるをえない」という(方光燾「体系と方法」《中国文法革新討論集》44頁)。

こうした観点は正確である。広い意味における形態から出発してどうやって品詞を分類できるだろうか。たとえば、次のように言うことができる。「一個人」、「兩塊墨」、「三支筆」、「四本書」、「五杯酒」。また次のように言うことができる。「這[这]個人」、「那塊墨」、「那支筆」、「這本書」、「那杯酒」、「這種道德」、「那種思想」、「某種工作」、「一次戦争」。単語の「人」「墨」「筆」「書」「酒」が「一個」「兩塊」「四本」「五杯」と結合することができ、また「這」「那」と結合することができ、単語「道德」「思想」「工作」「戦争」が「這種」「那種」「某種」「一次」と結合することができるだけに、当然これらすべての単語は1つの文法的範疇に入りうるものであり、同一の品詞に属するものとして規定することができる。仮にこれらを「名詞」と呼ぶことにしよう。この場合、前に「一個」「這子」「這種」などがくることができるということが、名詞の形態になるのである。この形態に根拠して、「一個」「這個」「這種」などの後ろにくる諸単語が名詞であると規定することになる。まさにこれが諸単語の相互関係とそれらの結合相に根拠して、品詞を分類する方法である。

もちろん、名詞の形態はこれにとどまるものではない。それだけではなく、「一個」の後ろにくるあらゆる単語がすべて名詞になるのではない。たとえば、「唱一個痛快」や「打他一個半死」

の単語結合において、単語の「痛快」や「半死」は名詞ではない。どうしてこれらを名詞と区別するのか。そのためには補充的に他の形態の助けを受けなければならない。

第一に、われわれは「一個人」とも言えるし「九個人」とも言える。しかし「唱五個痛快」とか「打他十三個半死」とは言えない。

第二に、われわれは「一個人」とは言えるし、「這個人」あるいは「那個人」とも言える。だが「唱那個痛快」とか「打他這個半死」とは言えない。このように、区別は極めて明白である。

次に、他の単語は次のような形式的特性をもっている。1)それらは前に「不」・「会」・「能」・「敢」・「該」などを付けることができる。2)後ろに「了」・「着」・「過」・「起来」・「下去」・「過來」・「過去」などを付けることができる。3)重畳することができる。単一の音節語を重畳するときには、そのあいだに「一」を挟み込むことができ、多音節語を重畳するときには単語全体を反復し、そのうち一文字だけを反復することはない。たとえば:

敢說 不笑 能跑 会跳 該唱 該休息
說着 笑了 跑過來 跳下去 唱過 休息過
說說 笑笑 跑跑 跳一跳 唱一唱 休息休息

もしこの系列の諸単語を「動詞」と呼ぶならば、上に挙げた諸形態は動詞の形態になるだろう。

こうした種類の諸形態にもとづき、「說」・「笑」・「跑」・「跳」・「唱」・「休息」はすべて動詞だとみなすことができる。[…]

また別の種類の諸単語があるのだが、この単語の前には「真」・「十分」・「非常」・「很」のような単語を付けられるもので、また後ろに「極了」・「得很」などを付けることができる。そのうち若干の単語は重畳することができる。単一音節語に対してはこれを重畳したうえで、原則的にその後ろに接尾辞(「兒」「的」など)を付け、二音節語を重畳するときには全体ではなくそれぞれの文字を繰り返す。たとえば:

快—真快, 十分快, 非常快, 很快, 快極了, 快得很, 快快的, 快快兒。

光榮—真光榮, 十分光榮, 非常光榮, 很光榮, 光榮極了, 光榮得很。

乾淨—真乾淨, 十分乾淨, 非常乾淨, 很乾淨, 乾淨極了, 乾淨得很, 乾乾淨淨。

もしこの種類の諸単語を「形容詞」と呼ぶならば、上に掲げたすべてのものは形容詞の形態となるであろう。この諸単語を、われわれは1つの範疇に所属させることができる。

(文鍊, 胡附「談詞的分類」《中国語文》1954年3月号, 10-11頁, 《言語学の諸問題》1955年第3号, 62-66頁)

結局この著者らの結論は次のようなものである。中国語の諸単語を品詞に分類する基礎となるの

は広い意味における形態である。この形態は個別的に見た単語においては見いだせない。したがって孤立した諸単語を分類するのは不可能である。これらを構造のなかで、相互連携、相互関係のなかで見なければならぬ。「品詞は構造的範疇であり、構造の外にはいかなる範疇に関しても言うことはできない。」

以上により、われわれは中国語において品詞を分類し、一定の文法的範疇を設定する重要な根拠となるのが、広い意味における形態——換言すれば、分析的形態であるということが分かる。

最後に、最近ロシア語文法学界において討論の対象となっているものとして、「状態の範疇」を1つの品詞とみることができるかどうかという問題がある。状態の範疇に所属させることができる単語だというものとしては、nado, mozhno, sovestno, st'dno, nel'zia, poraなどの単語のように、過去や未来時称において繫辞とともに表れ、常に述語としてのみ用いられる副詞あるいは名詞のことを言う。

ここで状態の範疇をロシア語において1つの品詞とみられると主張する学者の意見に耳を傾ければ、この単語が分析的に一定の形態をもっている点に依拠し、独特の品詞として規定することができるかと主張する。エン・エス・ポスペロフ[H. C. Поспелов]は次のように言っている。

状態の範疇という単語の部類について言うならば、それらが独特の品詞を成しているのは、それが述語の統辞論的機能をもって表れるという点にあるのではなく、その分類に独特の時称と法の文法的範疇を表現する分析的形態が内属しているという点にあるのである。(エン・エス・ポスペロフ「状態の範疇を擁護して」《言語学の諸問題》1955年2号, 56頁, 傍点は原著者による)

状態の範疇が、他の無人称の述語的な単語の造成と区別されるのは、それが時称と法の形態を分析的に表現するという点にある。(同上書, 58頁, 傍点は引用者による)

状態の範疇に属する単語は、述語の分析的形態の核心となり、そこで繫辞はただ一定の時称と法を表す文法的指標(pokazatel')として入る(sovestno bylo:直説法過去時称)。(同上書58頁)

結論。(1)状態の範疇に属する諸単語は時称と法の文法的変化を所有している。したがって、この諸単語は固有の意味において変化しない単語であると見なされえない。(同上書64頁)

以上、ロシア語、英語、中国語の場合を見てきたように、朝鮮語においても語体として表現される名詞、形容詞、動詞に文法的範疇が設定することができ、それはまさに主に吐の助けを得て表現されるという結論を得ることができる。まさに朝鮮語の名詞、形容詞、動詞には広い意味における形態-分析的形態があると言うことができる。

いま朝鮮語の文法的範疇とその表現手法を見れば、吐の助けを得て表現される文法的範疇としては格、法および階称を挙げることができ、そのほか時称、相および尊敬は形態造成の接尾辞(았, 었; 이, 리, 기, 히...; 시)によって、態は形式上自立した単語(버리다, 말다, 내다, 가지다...)によっ

て、それぞれ表現される。

したがって、朝鮮語において文法的範疇を表現する手段としては、基本的に形態造成の接尾辞、吐および形式上自立的な単語が服務しているのであり、総合的手法または分析的手法として表現される、これらすべての文法的範疇の問題は同じく形態論の分野に所属し、分析的手法として表現されるからといってこれを統辞論の分野に所属させることはできない。

ところで、朝鮮語における文法的範疇はただ吐によってのみ表現されると考えている人々がいる。こうした人々は形態造成の接尾辞までも吐のなかに含め、格、法、階称、時称、尊敬の範疇は吐によって表現されるが、態の範疇については、これが自立的単語の結合によるものであるために統辞論で議論するものであって形態論では議論できないとし、また相の範疇は接尾辞として表現されるだけに相を1つの範疇とは見ることができず、被動詞、使役動詞という動詞の種類がさらにあるものと見なければならぬと主張する。

しかしながら、こうした素朴な見解が何らの科学的根拠ももちえないことは、既に論述したことによっても明らかである。「먹어 버리다」, «가고 말다», «견디여 내다», «들어 가지다」などの表現手法は、まさにロシア語や英語における分析的手法にも対比しうるものであり、その手法はたとえ分析的だとしても、当然に形態論で議論しなければならないことは、長々と説明する必要もない。

次に、被動詞や使役動詞を、自動詞および他動詞と同一の資格をもった動詞の種類とは絶対に見られない。たとえば、「눅다」, «먹다», «눅이다», «먹이다», «먹히다」を同じようにいくつにも分類される朝鮮語の動詞の1種類とみることはできない。動詞は一般的に、それによって表現される行動の客体への転移性の可否によって転移動詞(他動詞)と非転移動詞(自動詞)との2種に分けることができ、朝鮮語の場合、一部の動詞は形態造成の接尾辞(이, 기, 리, 히...)の助けを得て、使役または被動の意味を表しうる。したがって使役動詞、被動詞という名前の別種の動詞を設定するのではなく、「눅이다」は自動詞«눅다」の使役形、「먹이다」は他動詞«먹다」の使役形、「먹히다」は他動詞«먹다」の被動形であり、換言すれば自動詞または他動詞の1形態とみなければならぬだろう。

しかし形容詞«높다」から派生した«높이다», «좁다」から派生した«좁히다」などは、それぞれ«높다», «좁다」の使役形ではなく、形容詞から派生した他動詞である。したがって、ここで形容詞に添加された接尾辞«이», «히」は、形態造成の接尾辞ではなく、単語造成の接尾辞と見なければならぬのである。

IX

以上で解明した諸問題に関連して、朝鮮語文法体系の叙述上、必ず解決しなければならない1つの問題がある。それは語体と吐との相互連携、結合関係を文法のどこで示すのかという問題であ

る。この問題の解決に2つの方式がありうるのだが、1つは語体と吐との結合関係を吐という品詞の条項に集めて、そこで初めて示す方式であり、もう1つは名詞、形容詞、動詞のそれぞれの語体の条項で、語体と吐との結合関係を示したうえで、再び吐の品詞の条項で吐の本質を明らかにする方式である。

筆者は、後者の方式を採択することを主張する。それは、吐が朝鮮語において文法的範疇を表現する形態となるものであり、名詞、形容詞、動詞がそれぞれ一定の文法的範疇をもつものと認められるからには、名詞、形容詞、動詞の語体の条項において、その語体がどのように文法的な諸範疇を表すのかという観点から吐との結合関係を示さないわけにはいかないのである。もしそのようにせず、そうした格、法、階称などの文法的範疇とその表現形式を吐の部分にすべて集めて示したとすれば、朝鮮語の名詞、形容詞、動詞はそうした文法的範疇をもたないものになってしまうし、また文法の体系上、朝鮮語形態論のあらゆる重要な諸問題が吐の条項に行ってしまう、膨大な内容を叙述してしまうことになるだろう。すなわち、名詞の格範疇が名詞の部分で叙述されず、吐の部分で初めて叙述され、形容詞の法範疇が形容詞の条項で叙述されず、吐で初めて叙述されるということである。これは間違いなく不合理なことである。また、そうした場合、生きた言語現実を正しく反映するものにはなりえない。実際、言語行為においては名詞、形容詞、動詞が常に一定の形態をもって表れるにもかかわらず、文法体系においてはこれらが形態をもたない状態で提示されるというのは、確実に不自然なことである。

とはいえ、それぞれの語体において語体と吐との結合関係を示し、再び吐の条項で吐の本質を明らかにする方式は、文法体系叙述上、無用の重複であり、こうしたことはありえないという者がいるかもしれない。

しかしながら、単語と形態部との二重的性格をもった単語の場合、単語としての資格としては一定の品詞の名前のもとにひとまず自らの叙述位置をもちながら、また他の単語と結合して形態部の役割を果たす際には、その異なる他の品詞の条項とそれとの結合状態が提示されるのは、論理上ありうることであり、また実際そのような例をロシア語において見ることができる。

ソ連科学院編纂《ロシア語文法》は、形態造成的な助詞と単語造成的な助詞について、次のように叙述している。

§984. 若干の単語においては、個別的な単語の標識を喪失し、助詞となって、単語の文法的形態の造成のために、あるいは新たな単語の形成のために服務する。助詞のこのグループは、さらに2つの大きなグループに——既に上で考察した助詞とはまったく区別される、単語造成的助詞と形態造成的助詞に——区分される。

単語造成的および形態造成的助詞は、3つの基本的な群に細分される。

- 1) 動詞の各種の形態を造成する助詞。
- 2) 未定の意味を付与し, 未定の代名詞や副詞の造成に服務する助詞。
- 3) 否定を表し, 否定代名詞と否定の意味をもった他の品詞の造成に服務する助詞 **ne** と **ni**。

§985. 動詞の形態を造成するのに参加したり, あるいは動詞の形態の意味にあるニュアンスを付与する助詞には **by**, **byvalo**, **da**, **pust'**などの助詞が属する。

助詞 **by** は, 動詞の前または後に使用され, それと結合して条件-仮定法を造成する。[...]

助詞 **byvalo** は, 不完了態の現在, 過去の動詞形態と完了態の未来の動詞形態に対して過去に不規則的に反復された行動の意味を付与する。[...]

助詞 **pust'**と **puskaï** は, 単数および複数3人称動詞の命令形を造成する。[...]

助詞 **da** は荘厳体の動詞の命令形を造成する。[...]

§986. 未定の意味を付与する助詞は, 代名詞と代名詞的副詞の構成のなかで, あるいはそれらと結合して使用される。

未定の助詞 **ne-**, **koe-**, **-to-**, **-libo**, **-nibud'**は, 機能の点で接頭辞と接尾辞に比肩しうる。例:
kto-nekto, **kto-to**, **koe-kto**...

§987. 否定の単語造成的助詞 **ne** と **ni** は否定を表し, 未定および否定的代名詞と副詞を造成するのに服務する。

否定の助詞は代名詞が前置詞とともに間接的に使用されるのには, 代名詞とともに1単語として融合されない。例: **ni u kogo**, **ne u kogo**, **ni u chego**, **ne u chego**。

(ソ連科学院編纂《ロシア語文法》第1篇, 650,651頁。またモスクワ総合大学編纂《現代ロシア語:形態論》430-431頁。V.V.ヴィノグラードフ《ロシア語》668頁参照)

こうして, 形態造成的助詞 **by**, **byvalo**, **pust'**, **puskaï**, **da**, **siã**などは, それぞれ助詞の条項で説明されると童子に, また動詞の該当する条項においても再び説明されており, 単語造成的助詞 **-to**, **-libo**, **-nibud'**, **ugodno**, **koe-**, **ne**, **ni**などはそれぞれ助詞の条項で説明されると同時に, また代名詞または副詞の条項でも再び説明されている。

代名詞: **kto-to**, **chto-to**, **kakoï-to**, **cheï-to**, **kotoryï-to**; **kto-libo**, **chto-libo**, **kakoï-libo**; **kto-nibud'**, **chto-nibud'**, **kakoï-nibud'**; **kto-ugodno**, **kakoï-ugodno**; **koe-kto**, **koe-chto**; **kse-kakoï**...

副詞: **gde-to**; **kuda-to**, **otkuda-to**; **kuda-libo**, **gde-libo**, **otkuda-libo**; **gde-nibud'**, **otkuda-nibud'**; **kuda-ugodno**, **gde-ygodno**, **otkuda-ugodno**; **koe-kuda**...

これ以外にも形容詞の最上級の表現に服務する **samyï** は代名詞と形容詞の条項において, 比

較級の表現に服務する *bodse*, *mense* は副詞と形容詞の条項において、それぞれ2度ずつ説明されている。

このような事実が示しているように、単語と形態部との二重的な性格を帯びた単語の場合には、それらが不可避的に2カ所において説明されていることが分かる。またこうした説明の方式は、決して無用の反復なのではなく、その単語の性質——ここでは吐の性質をさらに精密に規定するのに役立つのである。すなわちそれぞれの語体と吐との結合関係においては、文法的範疇の表現者としての吐を、その範疇別に大別しながら説明することになり、品詞としての吐の条項においては、それぞれの個別的な吐の意味-文法論的な本質を、複数の吐を相互に対比させながら具体的に説明すると同時に、他方では統辞論的に文章において吐がはたらく機能と関連させて吐の性質を説明することになるのである。こうすれば、無用に反復して吐を説明することなく、朝鮮語形態論において最も重要な役割をになう吐の本質をより具体的・分析的に明らかにすることができるだろう。

最後に、ここまで叙述したすべてのことを要約し、簡単な結論を述べれば次のとおりである。

- 1) 朝鮮語の単語の部類に4つの類型を設定し、品詞としての吐を認定する。
- 2) 吐の概念を、形態造成の接尾辞と区別し、それがもつ統辞論的な機能の観点から規定する。
- 3) 吐は名詞、形容詞、動詞に共通して適用される。いわゆる«이다»[である]は、「指定詞」または「一種の動詞」などの特別な品詞ではない。
- 4) 吐には単語と接辞との二重的、両面的な性格がある。
- 5) 朝鮮語の名詞、形容詞、動詞には文法的範疇があり、それは分析的な手法によっても、すなわち吐あるいは形式上の自立的な単語との結合によっても表現される。
- 6) したがって朝鮮語の基本的な品詞の文法的範疇は、イ)吐によって、ロ)形態造成の接尾辞によって、ハ)形式上自立的な単語によって表現され、これらすべてのことは形態論において議論されなければならない。
- 7) 朝鮮語文法体系上、吐は名詞、形容詞、動詞の語体の条項において文法的形態の資格でそれらの結合関係において提示され、再び品詞としての吐の条項において叙述されることになる。これは吐がもつ特異な二重的性格からの当然の帰結である。

以上のように結論づけたうえで、これらの問題に関連して今後必ず解決しなければならない問題として、次のようなことを提示する。

- 1) それぞれの個別的な吐の意味-文法論的な本質を具体的に精密化すること、
- 2) 吐の内部分類をさらに細密に規定し、吐と他の品詞との関係を一層精密にすること、
- 3) 特に今後のばらし横書きフロッソカロスギに関連して、どのような吐は付けて書き、どのような吐は分けて書

くのかという、^テ分^イか^ヨら^ス書^ギきの問題を解決すること。

以上、吐の問題を中心に、朝鮮語形態論のいくつかの基本的な問題を解明しようと試みた。過度に抽象的にこの問題を議論した感がなきにしもあらずだが、これは結局、一般言語学的な理論を朝鮮語の現実に適用し、朝鮮語固有の立場から朝鮮語文法の特徴を明らかにしてみようという筆者の小さな努力の表現にすぎない。